中学生えっせんす！

帆立レノン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
中学生えっせんす！

【Ｎコード】
Ｎ１７６６Ｍ

【作者名】
帆立レノン

【あらすじ】
はい！この物語は私―姫野みなづきと！
こーちゃんこと俺の―
ラブ×２コメディー――だよっ
勝手に事情を捏造するな！
さっきのは冗談で…本当は切なくて甘酸っぱい中学生生活を描いた……涙有り、笑い有りのハートフルラブコメディー―だよっ。
さっきと言ってる事変わんね――！！……ま、こんなノリで織り成す物語。

私達のえっせんすがたっぷり詰まった物語をご賞味あれ！

俺と私の中学生えっせんす！

キャラクター設定

「キャラクター設定」

趣味で書きました。あくまでもオマケと考えて下さい。
本編と相違が合っても大目に見てあげて下さい。
本編が進む毎に追加させていただきます。

「メインキャラクター設定」

こうちゃん……本編の主人公。何処にでも居そうな目つきの悪いが、二枚目には引っ掛かると思われる少年。捻くれ屋の不良を気取っているが、かなりのお人よし。結局、幼なじみの姫野みなづきには振り回され放し。４人のメインメンバーの中で唯一の常識人な為、ツッコミ役、イジられ役として定着しつつある。
みなづきに対し、好意を抱いているがそれを出さないようにしている。８年前の事故で心に深い傷を負い「眠り病」（ナルコレプシー）に似た症状が現れるようになった。
本名は今の所不明。名前はちらっと出てきた。
プロフィール
身長１６０ｃｍ
体重５０ｋｇ
血液型Ａ
スリーサイズ不明
好きな物……ゲーム。漫画。
苦手な物……同情。おせっかい。深恭子。
特技……料理。喧嘩。

姫野みなづき……主人公の幼なじみ。美少女、天才、運動真剣抜群の完璧超人。瞬間記憶能力を持ち、日本でも最高クラスの頭脳を持つが、一周回って基本天然お馬鹿。考え方も楽観的で理想的。ど天然。料理上手。

主人公とは家が近所で、昔から二人でよく遊んでいた。主人公に恋心を抱いている。

プロフィール

身長１６０ｃｍ

体重ｘｘｋｇ（何者かに塗りつぶされ不明）

血液型Ｏ

スリーサイズ　Ｂ８５／Ｗ５８／Ｈ８０

好きな物……こうちゃん。お料理。家事全般。げーむ。本。

苦手な物……特に無し。

特技……瞬間記憶能力。

深恭二　（ふかめきょうじ）……主人公の親友。優し気な顔立ちで器も広く頭が良い高スペックな男。幼い頃、主人公に虐めから助けてもらいそれがキッカケで友達になる。

主人公のピンチを爽やかな笑顔で眺める最高の親友。

プロフィール

身長１６２ｃｍ

体重５２ｋｇ

血液型Ｏ

スリーサイズ不明

好きな物……こう。友達。サッカー。

苦手な物……姉。

特技……家事全般。姉の世話・

小野瑞歌　（おのみずか）……主人公のクラスの　委員長。おさげに眼鏡。でも巨乳では無い。ぱっと見常識人だが、みなづきＬｏｖｅな百合少女。その為か主人公に嫉妬している。変態ではあるが意外に面倒見が良い。とても妹思い。

プロフィール

身長１５４ｃｍ

体重ＸＸｋｇ（血痕に塗りつぶされ不明）

血液型Ｂ

スリーサイズ　Ｂ７５／Ｗ５５／Ｈ７９

好きな物……みなづき様。ＧＬ系の同人誌。妹。

嫌いな奴。みなづき様に群がる害虫。ルールを守らない者。

特技……家事全般。ストーキング。

「その他キャラクター」

姫野皐月　（ひめのさつき）……みなづきの母親。美人だが、みなづきに負けず劣らずの天然。旅行が趣味。主人公とみなづきがくっつくように色々画策している。

現在旅行中で家に居ない。

プロフィール

身長１７８ｃｍ

体重ヒミツ♪ｋｇ

好きな物……旅行。娘。娘の幼馴染。

嫌いな物……特に無し。

篠崎裕也　（しのさきじゅんや）……主人公のクラスの担任。真面目だが地味で、２８歳独身。

プロフィール

どうでもいいから省略。

小野詩歌　（おのしいか）……瑞歌の妹。姉と違って純粋無垢な小学３年生。長いポニーテールが特徴。極度の方向音痴で一人で出掛ける時は大抵は迷子になっている。とても姉思い。

プロフィール

身長１２６ｃｍ

体重３０ｋｇ

血液型Ｂ

好きな物……おねえちゃん。こうちゃんおにいちゃん。

嫌いな物……ひとりぼっち。

特技……すぐに迷子になる事。

深恭子　（ふかめきょうこ）……本編未登場。恭二の姉で、暴君を絵に描いた豪快人だが容姿はかなり幼い。容姿と性格が凄くアンバランスなよく分からない人物。恭二の妹とよく間違われる。

プロフィール

身長１２４ｃｍ

体重３２ｋｇ

血液型Ｏ

好きな物……酒。コーヒー。おちょくりがいのある奴。

嫌いな物……軟弱者。下種。上司。

特技……喧嘩。射撃。

～別れの後の並木道～

プロローグ「別れの後の並木道」

桜並木。桜吹雪とはこう言うのを言うんだな。
正直……顔にかかって鬱陶しい。
４月１日。そう、今日は高校入学式の日。俺が思う感想と言えば、
「……面倒くさい…」
『……こうちゃんは、いつも一言目にはそれだよね』
あいつなら、そう俺にツッコミを入れただろう。
「なんだ……やっぱ、あいつがいる事が当たり前になってたのか……」
よく笑う癖に泣き虫なあいつ。大人びてる癖に子供っぽいあいつ。
そして、厳しい癖に優しいあいつ。
桜が舞う……そういや…あの日もこんな感じだったのか……

Ｅｓｓｅｎｃｅ１「始まりは文化祭」

放課後。授業と言う柵から解放される時間。いつもなら、寄り道しながら帰るつもりだったが、
「こうちゃん！　何勝手に帰ってるの！」
聞き覚えのある声に呼び止められた。鬱陶しいなとか思いながら振り向くと予想どおり、奴がいた。
姫野みなづき。
俺の幼なじみで、髪はセミロング。中学生にしてはかなり大人びた雰囲気だ。高校生だって言ってもばれねぇよなといつも思う。発育もいいしな？…成績優秀運動神経抜群と言う高スペックに加え、美人とくればもはや完璧だ……が中身は世話好きで、お節介で子

供みて―な奴なのだ。
「みな、か……何だよ……放課後だろ？　帰るのは当たり前だろーが」
居残り何て有り得ねぇ。寄り道ができない何て人生の四分の一は損してる。
「駄目だよぉ！　こうちゃんも文化祭実行委員でしょ？」
言われて気付く……そういや篠崎（担任だ）がそんな事言ってたっけ……そーいやもうそろそろ文化祭か……
「そーだっけ？　んじゃサボるからよろしく」
まぁ……言っても無駄だろうがそう言ってみる。
すると、みなはますます頬を膨らませ、
「駄目だって言ってるでしょ！　……ほら、行くよ！」
「わっ！　こら引っ張るなって！　……面倒くさい……」
やれやれと思う。そうは言っても逆らえないんだよなぁ。これが。
「それでは、今年の文化祭について――」
生徒会長（名前何だっけ？）が何か話している。ああ、眠い……
……何で俺がこんな事を……まぁ、楽出来そ―だから文化委員選んだんたから、まぁ自業自得と言えばそうだけどな。
「それで……何意見はありますか？　――――くん？」
ん？　おっと俺の名前だ。ぼーとしてたからか、当てられてしまったようだ。
「……さぁ、適当でいいんじゃね？　例年通りで…ぐはぁ！」
頭に軽い衝撃。みなが俺を資料で殴りつけたらしい。
「いってぇ……何すんだよ、みな」
「何するんだ…じゃないよ！　真面目に考える！」
「……もういいです」
呆れたよう呟く生徒会長（名前がまだ思いだせん）。
「では……姫野さんは？」
「はい！　私は…」
……はぁ……本当何してんだろ？　俺……

結果として、俺は会議の一欠けらも聞いていなかった。結局、生徒会長の名前も思いだせなかったし……

「……はぁ…」

場違いな場所に放り込まれたみたいだった。あー言うのは苦手だ……

「……帰ろ……」

みなはまだ会議中のようだし、待つ義理なんて……ないし……な。

「……ん？」

校門まで来たところで、走ってくる人影…おお速い速い…

「って、みな！？」

車みてーなスピードで走る人影は、何と俺の幼なじみだった。

加速装置でも使いやがったか？

「～～ちゃーん！」

息を切らしながら俺の近くまで来て止まる。キキーとブレーキ音が（比喩じゃねぇ）響く。

アグレッシブ過ぎるわ。

「……ハァハァ…間に合ったよ～……」

「何だよ…会議は？」

「うん。抜けてきた！」

「はぁ！　何で？」

「ん～こうちゃんと一緒に帰りたかったから――かなっ♪」

「ぶっ！？」

何でコイツは臆面もなく、んな恥ずかしい台詞を口に出せるんだよ！　大体コイツ、俺が一人で帰るの見抜いてやがったな。

「それが理由――だよっ！ほら、帰ろ？」

とびきりの笑顔……人類であれば誰もが見とれるであろう。無邪気で、裏のない笑顔。もちろん俺も例外ではない。

ああ……ずりーな。

「……ああ」

そのみなの笑顔に俺は何度助けられただろう。

俺の生い立ちは、さほど話して楽しいものじゃない。かなり前母親が交通事故で死んだ。俺を、庇って。そして、親父はそれ以降仕事に没頭するようになった。単身赴任で家にいない事も多く、俺は常に一人だった。その頃からか……俺が少しひねた性格になったのは。まぁ……これは元からだったのかも知れないが……当時１０にも満たないガキだった俺は、世の中の全てが信じられなくなった。

ある日俺は、公園に居た。親父が家に帰ってきて……家に居づらくなったんだっけ。

ただ一人で、公園で遊ぶ同年代の奴らを、俺はただ見ているだけだった。夕方になっても、俺は公園に居た。もしかしたら、もしかしたら……親父が迎えに来てくれるかも知れない。そんな馬鹿みたいな幻想を抱いていた。

そんな時、ある少女が俺の前に居た。俺をしっかりと見ていた。

『何だよ……何か用か？』

ぶっきらぼうにそう言ったのを覚えている。普通の女の子だったら怖くて逃げただろう。そんな口調で言った。俺は拒絶の意思を少女に伝えたつもりだった。

だが、その女の子は、

『一緒に帰ろう？』

とびきりの笑顔で、姫野みなづきは、そう俺に言ったのだった。

「……ところで、夕飯はどうするの？」

「ん？　ああ最近は、インスタントだから、材料もないし……」

「……」

みなの表情が変わる。

やべっ！　地雷踏んだよ俺。久しぶりだったから、マジで忘れて

た。コイツはインスタント系統が嫌いだったんだ。
「こうちゃん……私と約束したよね？　お料理は、必ず手を抜かないって……」
笑顔のまま怒るなよ……こえ―って！
「やっぱり……私が毎日作りに来ないと駄目みたいだよ～」
ハァと大仰に溜息をつき、コイツはとんでもね―事を言い出した。
「やめてくれ！　ただでさえ妙な噂が立ってるのに！」
同棲だとか何とか……俺達まだ中３だぞ……有り得ねぇよ。
「噂は、噂――だよっ。……私は気にしないけどな～…寧ろ嬉しいかも……」
「あ？　最後の方聞こえなかったぞ？」
「気にしない気にしない♪決めた！」
「は？　何を？」
「今日は私が作ってあげる」
「……マジ？」
なんて言うか……そりゃ、久しぶりだな……
「じゃあお買い物いこっ？」
「分かったよ……」
結局最寄のスーパーに寄る事になった。はぁ……こーゆうのがまた変な噂を呼ぶんだよな…

スーパー『コズミニック２４』近所のスーパーだが、見る度に店名変えろや！　と思う。どの辺がコズミニックなのか、そもそもコズミニックってどういう意味だよとかツッコミ所が多過ぎる店である。
以前、みなにも言ってみたが、
『そうかな？　別に壮大そうで良いんじゃないかな？』
とか何とか宣いやがった。あいつのセンスを本気で心配した。
つーかスーパーに壮大さとか要らんだろ。しかも店内普通の広さだし……

ああ、ちなみに２４とか言いながら２４時間営業ではねーのである。普通に９時くらいには閉まる。
まぁそれ以外は普通のスーパーとなんら変わりはない。セールとかも多いのでそれなりに人が多い。
「……ていうか…何買うんだ？アイツからの振込みで一応金には余裕はあるけど…」
「ん～とね…それは買ってからのお楽しみ―だよっ♪」
ふぅん……じゃあ期待するとするか……とんでもなく美味いだよな…みなの料理。
「……んと…これと…ああ！これも！」
人参、ジャガ芋、玉葱、そして牛肉……つーかすぐ分かる。子供が大好きなあれだ。
「……カレーか？」
「わっ。よく分かったね！　そうだよっ♪」
「激辛な」
「私は甘口がいいんだけど…」
「おっ……やっぱカレー粉から作るのか？」
「うん。あと香辛料も……」
……金が…ゲームが買えなくなっちまうな……まぁみなのカレーが食えると思えば安いモンか……

スーパーを出て、俺達は帰路についていた。
「はぁ……」
「いっぱい買ったね」
「ゲーム代棒に振ったんだから飛び切り美味いの頼むぜ」
「うん！任せて――だよっ」
そう言って微笑むみな。
「……ああ…」

「とりあえず私、着替えてくるね」

「ああ」
アイツん家は俺の家の前の二つ横……１０秒足らずで着く距離だ。
「……ただいまっと…」
誰も居ないけど、ただいまぐらい言わないとな……
座敷部屋を覗くと遺影があった。綺麗な女性が美しく、優しく微笑んでいた。線香を新たに立てる。――佐奈…享年――歳。
「……」
ただいま……母さん。
感傷を振り払う。みなが来るんだ。しけた顔はしてられない。
俺の部屋に入り、制服を脱ぎ私服に着替える。
ピンポーン！
インターフォンが鳴る。……はやっ！
「はいはい…今行くよっと」
玄関のドアを開ける。純白のワンピースを纏ったみながいた。下まで真っ白……カレー作るのに白ってお前……
「えへへ……似合うかなっ？」
「……ああ、お前本当に白好きだよな……」
「こうちゃんは黒好きだよね」
まぁ……上下黒で固めている俺には言われたくねーか…
「別に……好きって訳じゃない……」
「……とりあえずお邪魔するね」
「おーお入れ入れ」
「その前に佐奈さんに挨拶していい……かな？」
俺に気を使ってかそんな事を言うみな。
「ああ……」
座敷部屋に入るみな……黙祷を捧げる……
「……もう…いいか？」
「うん……」
そう言って微笑むみな。きごちない、みなにしては珍しい無理をしたような笑顔。

「……」
俺はお前にそんな顔してほしくないんだけどな……
「うあ―ちょっと散らかってるねー」
居間とキッチンに入ったみなの第一声。
「そうか？」
女子から見ればそう見えんのか？　男一人暮らしにしては片付いている方だとは思うが……
「……おお！　本当に空だね…その間は電気切っときなよ」
「めんどい…お茶取ってくれ。ちっさいペットボトルの奴、烏龍じゃなくて緑な……おおそれそれ！　サンキュー…
その辺は好きにいじってもいいけど、俺の部屋に入ってくんなよ」
「何で？　えっちな本でもあるの？」
「ぶっ！」
飲んでいたお茶が鼻から逆流した。平然とした顔でんな事聞くな！
「もしかして、図星？　駄目だよ。えっちな本はもっと大人になってからじゃないと」
「げほっ……んな訳ないだろーが……色々見せたくねーもんがあるんだよ……お前だって俺に見られたくないのあるだろ？」
ちなみに図星なのは秘密だ。仕方ないだろ？　思春期だもん。
「私は、別にいいよ？」
「ぶぅ！」
むせた。どんだけオープンなんだよコイツは？
「こうちゃんだからって言うのもあるけどねっ」
「……勘弁してくれ」
まぁ幼なじみだし、家族みてーなモンだからな……
「それじゃ…そろそろ作ろうかな」
「ああ、手伝うぜ」
「いーよいーよ！今日は私が作るの。こうちゃんは休んでていいから！」

「あ、ああお前が言うなら―」
テキパキと調理を進めていく。凄いな包丁捌き……俺じゃ、ああはいかない。
「なぁ……そろそろカレーのスパイスの配合教えろよ」
みなづき特製カレー。俺ではあの味が出せないのだ。
「……コレは、姫野家の直伝なの。だから秘密――だよっ」
「ちぇっ……しゃーないな…」
自力で見つけ出すしかないか……
つー訳で、暇。部屋からゲームでも持ってくるか……勉強しようと思わないのが俺らしい。

「おっ……」
部屋から薄型ＰＳ２（ＰｌａｙＳｔａｎｄ２）を持ってきた時、良い匂いが漂ってきた。仕込みは終わり、後はアクを取りながら煮込むだけらしい。つーか手際良すぎだろ……
「じゃあ対戦でもやるか？」
「うん！やるやる！」
意外かも知れないがみなはゲーム好きだったりする。アクションとかＲＰＧとか。
スイッチを押して電源を入れ、ソフトを入れる。
『ロッソ・サーガ』対戦アクションものだ。２年くらい前に発売されたソフトだが、操作性もよく、使えるキャラも多い為アクションゲームの中では何気にお気に入りだ。
「うお…いきなり強キャラ使うのかよ」
「えへへ……先手必勝！」
対戦中……
圧勝。
「……よわっ」
「ひ、久しぶりだったからね～よーし次は負けないよ！」
対戦中……

圧勝。しかも１０秒。
「……」
「ち、調子が悪いのかなっ？次こそ！」
対戦中……
圧勝。しかもノーダメージ。
「……相変わらず下手くそだよなぁ……」
「へ、下手じゃないもん！」
好きと上手はまるで、別物だ。みなはゲームは好きだが、操作は致命的に下手だ。そりゃーもう致命的に。
某有名ＲＰＧで雑魚の中の雑魚である某スライムくんに負けたのはもはや伝説となっている。
「つ、次こそは！」
対戦中……
圧勝。しかも弱攻撃のみで。
逆に負ける事が難しい。
「ここまで来るともはや才野だよなぁ」
みなの表情が変わる。ムキになってる時のアレだ。
しまった。つい本音が……
「こうなったら勝つまで戦う――だよっ！」
こーゆうところは大人げないな……
「何回やっても無駄だと思うけどな……」
対戦中……
圧勝。しかも投げのみで。
そんなこんなで、俺とみなの対戦は鍋が吹きこぼれるまで続いた。

「うわ……うまそう…」
鍋を覗き、そう呟いた。黄金カレーだ。
「我ながら上手くできたかな」
早く食いたい早く食いたい早く食いたい……良い匂いで唾液が止まらん。

「今、よそうから待ってね」
俺の心情を知ってかそんな事を言うみな。
カレーと白米の黄金比。最強だよな！
「「いただきます」」
早速一口。
「ヤバイ……うますぎる……！」
この味を表現できる、ボキャブラリは俺にはない。
言葉では言い表せない。敢えて言うなら――
「うまい！」
「うん。おいしいね！」
激辛ではなくピリッと辛い中辛ぐらいだな。ヤバイな……明日からレトルト食えない。
「あ！　こうちゃん、食べながらでいいんだけど……」
「ん……何だ」
「文化祭の事だよ。こうちゃん、私達のクラス、劇をやる事になってるよね」
「ん……確かそうだったな…」
まぁ……どうせ裏方だろうけどな。
「私とこうちゃん…主役をする事になりましたぁ――！」
パンパカパーン！
……は？
「は？」
「という訳で、明日から放課後練習――だよっ」
「待て、待て待て待て何を言ってやがるんですかお前は！」
俺は何処からツッコミをいれればいいんだ！
「いつ決まった！？」
「昨日の放課後。こうちゃん、さっさと帰っちゃうから」
「何で俺が！？」
「楽しそうだから」
「何故に主役！？」

「思い出に残るから――キョウ君もお似合いだって」
「恭二テメェ――！」
あの野郎――俺を売りやがったな！？
「冗談じゃねぇ！　俺は降りるぜ！」
人前に出るとか有り得ねぇ！
「駄目だよ。決まっちゃったんだし……それに、最後の文化祭なんだよ？　一緒に作ろうよ！思い出！」
思い出……か。
「……たかが文化祭だろ…何マジにやってんだよ」
「たかがじゃないよ！　最後なんだよ！　もう　二度ないかも知れないんだよ！」
「だったら！　……お前だけでやればいいだろ…俺を巻き込むなよ……」
「……こうちゃんとが……いいの…」
みなの縋るような声。
言葉が、詰まる。しばらく悩み、
「……しゃーないな…協力してやるよ……思い出作り」
結局、断る事が出来なかった。
「ホント！？」
「……ああ、出来る限りな」
「うん……えへへ…うれしいなっ」
屈託無く心の底から嬉しそうな笑顔。
本当に俺はこの笑顔に弱いらしい……

夕食も終わり、後片付けも終わった為、みなを送る事にした。まぁ送るっつー距離でもないんだけどな…
「……それじゃあまた明日！」
「ああ……」
時間は既に暗い時間。いい加減にしないと皐月さん（みなの母親）が心配するだろう。

「明日から、練習――だよっ。かんばろ！」
「へいへい……じゃあな」
がちゃ……
ドアが閉まる。さて、明日から忙しくなりそうだなっと……
文化祭まで、後１８日。

～別れの後の並木道～（後書き）

はい。帆立レノンです。
趣向を変えてラブコメを書いてしまいました。バトル好きな私にとっては異例な事です。今なら間に合うバトルに持っていけ！そんな声が聞こえてきそうでした……本来は短編にする予定でしたが、書いていく内にアレもコレもとなってしまい結局長編に…
……最近忙しく、更新はかなり遅くなってしまいました――
ｏｒｚ
ここまで読んで下さった方ありがとうです！私の拙い文章を見てくれる方、気長にお待ち下さい。
あっ。レジェンディアの方ストップするかもです。

Ｅｓｓｅｎｃｅ２「そろそろあんまんが恋しくなる季節だよね！」

Ｅｓｓｅｎｃｅ２「そろそろあんまんが恋しくなる季節だよね！」

目を覚ますと……目の前に何故か俺の幼なじみ姫野みなづきが居た。顔アップ。ああやっぱ可愛いなコイツ。

「おはよっ。こうちゃん！」

成る程……と言う事は俺はまだ夢を見ているらしい……そりゃそうだよなぁ……漫画みてーに幼なじみが起こしに来るなんて……リアルな夢だ……

寝ぼけながら、俺は現実逃避を選んだ。

「あれれっ？二度寝？駄目だよ…朝なんだから起きないと…」

本当に二度寝して何もかも忘れたいんだが……

そろそろ現実に帰らないと駄目かな……

「……な…」

「な？」

「何でお前がウチにいるんだぁ――！？」

目の前の不法侵入者に向けて叫ぶ。今年１番の大声だった。

「言い訳を聞こうか？」

「言い訳って？私悪い事してないよ？」

さらりと言い放つみなづきさん。真顔で言いやがったよ。コイツ！

「不法侵入は悪い事じゃないのか！？」

だとしたらいつの間に日本はそんなフリーダムになったんだ。それこそＲＰＧじゃあるまいし。

「不法侵入なんてしてないよ？だってここ、こうちゃんの家だし」

「俺の家そこまでオープンじゃねぇよ！」

タンス調べられるのか！？壷割られるのか！？

「あ……そういや最近のトラクエ、扉が開く音変わったよな。昔は

効果音だったけど、今は普通はガチャっていうよな」
「唐突に何言ってるかわからないけど、３Ｄだと違和感あるからじゃないかな？」
ふむ……最近のゲームは本当にリアルで……じゃなくてっ。
「どうやって入った！？」
「合い鍵だよ？相変わらず隠し場所変えてないからすぐに入れたよ」
「だからって男の部屋に入って来るかフツー……」
「とにかく、朝ご飯食べよっ」
……はぁ。何なんだよ一体。

朝食は昨日のカレーだ。当然ながら二日目のカレーは旨い。
当然のように俺の前に座ってカレーを食べているみなを除けば概ね良い朝だ。
「……ていうか。本当何で居るんだよ」
「んーとね……お母さんが旅行に出掛けちゃって」
「は？」
皐月さんの旅行好きは知ってるけど、何故こんなタイミングで？
「うん。だから一人じゃ危ないからこうちゃんの家に……」
ああ。成る程な。確かに女の子一人では危ない……って。
「ちょっと待て……皐月さんいつ帰ってくるんだ？」
「文化祭までには帰って来れるって言ってたよ？」
……え？
「って待て待て待て、つーことはアレか！今から最低でも二週間以上は俺の家に泊まるって事か！？」
「そだよ？よろしくね。こうちゃん！」
にっこり笑うみな。ああきっと夢だよなコレ。カレーが旨いのもみながここにいるのも夢な訳だ。
「こうちゃん？……って何で自分で自分の首を掻きむしってるの！

？」
がりがりがりがりがりがりがりがりがりがり全く痛くない。ならばこれは夢だ！……あっ。俺、深爪してた。

「結果……こうなる訳な……」
二人並んで登校。恥ずかしい事この上ねぇ……
「そかな？私は普通だと思うよ」
「俺は視線が痛いよ」
家から学校まであまり距離は無く、歩きだ。
こうして並んで歩くのが当然のようにみなは俺に話しかける。昨日まで一人だったというのに……
「ねぇ。こうちゃん」
少し真剣な口調でみなは俺に呼び掛けた。
「ん……何だよ？」
「最近私の事避けてない？」
……コイツは奇妙なところで鋭い。
「……気のせいだろ。いつもどおり接してるつもりだぜ」
避けていたのは事実だ。みなが俺に話しかける事はあっても俺から話しかける事はなかった。まさか、こんな強引な手段使ってくるとは思ってなかったけどな。
「……」
納得出来ないと言う表情だ。理由を話せば話せばで、面倒だ。
「……こうちゃん」
「……文化祭。頑張るんだろ？少しは自分の事を気にしろよ」
「うん。でもいつか理由、ちゃんと話してね」
「……」
みなは俺を問い詰めたりしない。それが俺の心をちくりと痛ませた。

「おはよー。朝から仲いいねお二人さん」
二人並んで、登校した為かそんなふざけた挨拶をする奴が居た。
「恭二……てめぇな」
深恭二。童顔で眼鏡がチャームポイント。コイツもまた文武両道を絵に書いた奴だ。しかもソレを鼻にかけないいい奴。女子から憧れ、男子からは嫉妬の的だ。
みなと同じく小学生の時から一緒で、お互い一番の親友だったりする。
「……一発殴らせろ」
が昨日の文化祭の件で友情に亀裂が走った訳だが……
「落ち着きなよ。目がマジじゃないか」
「駄目だよ。こうちゃん。キョウ君虐めたら……」
虐められてんのは俺だよ。畜生。
「どういうつもりだよ恭二。文化祭で俺とみなが劇やるって奴！」
そう言うとコイツもまた爽やかな笑顔で、
「僕はお似合いだと思うよ？お姫様と騎士様役。君達にピッタリじゃないか」
……お姫様に騎士？
「ってどんな劇やるんだよ！？」
「こてこての恋愛モノ。ストーリィもベタだけどね」
「中学生のやる内容かソレ！？」
「似合うと思うよ～こうちゃん」
嬉しそうな顔をしてそんな事を言いやがるみな。
さて、一つ想像してみようじゃないか。
一般的な格好良い騎士の格好をしている俺。
ベタでクサイ台詞を言う俺。
……ああ。俺死んだ。
「なぁ……一生のお願いここで使うから……変えてくれ！！」
「駄目――だよっ♪」

「却下。もう配役の表先生と生徒会に渡したからね」
ひでぇ……コイツ等人で無しだ……
「いっそ殺せ！！」
「ソコ五月蝿いわよ！！」
唐突に響く第三者の声。俺達の視線が声の主に集中する。
「……何だ。小野かよ」
そこに居たのは我等が委員長、小野瑞歌。おさげに眼鏡、巨乳では無く、よく言えばスレンダーだ。眼鏡外して髪をおろせば美人だろうと勝手に想像している。
遅刻が多く、授業態度の悪い俺によく突っ掛かってくるため、結果的に俺達とよく居る。
「何だじゃないわよ。もうすぐ朝自習よ。騒ぎ過ぎ！」
とまぁ立派な委員長で、一見常識人な訳だが……
「あっ。みなづき様は別ですよ」
俺達の中にみなを見つけると態度が急変する。
「瑞歌ちゃん、様は付けないでっていつも言ってるのに……」
コレである。確か、ある『きっかけ』で、いやその『きっかけ』は話すと長くなるから、割愛するが……その『きっかけ』でみなに心酔するようになったんだが……
「みなって呼んでくれると嬉しいなぁ」
「ああん……勿体なき言葉……」
恍惚な顔で身をくねらす小野。いや、正直言ってかなりキモいぜ？
「仲いいよね」
それを笑顔で見つめている恭二も怖い。
「色んな意味でな……」
この中で常識人は実は俺だけじゃないのか？
「……ところで小野。演劇の配役の表、本当に提出したのか？」
とりあえず一番聞きたかった事を聞く。先生に提出する前に小野を通す筈だからな。
小野はみなと話す時とは別な、虫か何かを見るような目で、

「はんっ。当たり前でしょ。期限より早く出すのは当然の事よ。今更変更も受け付けないわ」
そんな冷酷な返答をした。
「……マジかよ」
「腹括るしか無いみたいだね」
「一緒にがんばろっ。こうちゃん」
はぁ……結局こうなんのかよ。

そんな訳で放課後。これから俺の素敵な放課後ライフ。
「よし帰るか！」
「駄目だよ。こう」
深恭二が現れた。
くっ。どうする俺。
1．逃げる
2．逃げる
3．逃げる
「情けないと思わないの？こう……」
俺は逃げたした。
「あっ。約束したでしょ？」
しかし回り込まれてしまった。
逃走！！
「男なら覚悟決めなって」
「みなづき様に楯つこうというの！」
敵の増援。
クソっ。どうすれば？
1．諦める。
2．諦める。
3．諦める。

「って何で、諦めるしか選択肢が無いんだ！？」
「まぁこうの選択肢は最初から決まってるんだけどね」
などと宣いやがる恭二。ひでぇ……コイツは俺の親友じゃなかったっけ？
「と言ってもまだ練習はやらないよ。はい台本」
そう言って恭二に渡されたのは割りと厚めの冊子。
「物語の内容も書いてあるからね。帰ったらちゃんと読みなよ？」
「……へいへい」
俺は渋々と答えた。
「今日は帰っていい訳か？」
「うん。まだ文化祭まで時間あるからね。というかこう文化委員でしょ？日程を知らないのがびっくりだよ」
「……役員会議寝てたからな」
基本みなに任せっ放しだし。
「そういえばみなは？」
周りを見てもみなの姿は無い。教室にはいないみたいだが……？
「はんっ。みなづき様はアンタのような愚民とは格が違うのよ。みなづき様は、各クラスを回ってるのよ」
唐突に話しに入ってくる小野。かなり上から目線の説明だが、いちいち突っ込んではいられない。
「はぁ？何でそんな事……」
「まだ文化祭の出し物決まってないクラスもあるのよ。一年とかはとくに。その手伝いに行かれたのよ。さっき先生と話してるのを見たわ」
「……ソレ、アイツの仕事じゃねぇだろ」
お節介もいいトコだ。馬鹿じゃねぇのか……
「ああ……弱者にも公平に手を差し延べるみなづき様…素敵です～」
トリップしたコイツは放っておくとして……
「さて、俺はもう帰るからな。恭二」
「ん……いいの？みなつぎちゃん置いて帰って」

「……何でアイツを待つ義理があんだよ」
「何よアンタ！みなづき様を手伝わずに帰る気なの！？」
いつの間にか正気に戻った小野が俺にそんな事を叫ぶ。
「ああ。どーせ手伝える事なんかありゃしねぇんだからな」
「っ！？アンタねぇ、みなづき様がどんな思いで――」
「止めなよ。小野ちゃん」
激昂しかけた小野を恭二が諌める。ナイス、その間に退却するとするか。
「じゃあな」
「あっ。こら！待ちなさい！」
そんな小野の声を背後に俺は教室を後にした。

「何よアイツ……」
怨敵が去っていくのを、殺意の視線で見送る小野。そんな小野の様子に恭二は苦笑いを浮かべながら、
「こうは不器用だからね」
そう呟いた。
「はぁ？何言ってるのよ？」
「昔からそうなんだよ。素直じゃないとも言うかな。本当は誰よりも優しいんだよ」
昔の事を思いだしながら、恭二は呟く。

『ど、どうして助けてくれたの？』
幼い恭二は顔が痣だらけになった少年に問い掛けた。
いじめっ子達をたった一人で追い払らった少年は
『ちげぇよ。べつにおまえをたすけたつもりはねぇ……ただアイツらがムカついただけだ』
顔を背けながら、答える。この頃から聡い恭二はそれが嘘だと気付いた。

『ほら』
恭二は差し延べられた手を取るその手は温かかった。

「本当に変わってないな～こうは」
昔を懐かしむような恭二の表情それを見ながら小野は、
「……」
（……幼なじみか）
少しだけ、疎外感を感じた。
「ん。どうしたの？小野ちゃん」
「……何でも無いわよ。私は役員の仕事あるから」
そう言うと小野は教室を出ていった。
「小野ちゃんも素直じゃないよね」
苦笑いを浮かべながら恭二は呟いた。

（遅くなっちゃったな……）
みなづきが、全ての仕事を終え帰ろうと思った頃には、既に日は傾き暗くなっていた。
みなづきも表情も暗い。それは別に暗いから危ないなとか、寒いし帰るの辛いなとかではなく、
（今日は、こうちゃんと帰れなかったな……）
それだけだった。
でも家に帰ればきっと仏頂面で迎えてくれる。それを想像するだけで幸福だった。
（うん。早く帰ろっ）
足早に玄関を出る。少し肌寒く感じる。

そろそろあんまんが美味しくなる季節だなとみなはぼんやりと思った。
「……え？」
みなづきは自分の目を疑った。校門の前に立っているのは、
「よぅ。遅かったな」
仏頂面で待つ、みなづきの思い描いていた幸福だった。
「こう……ちゃん？」
「何で疑問系なんだよ。あ～先言っとくがついでだぞ。その辺でぶらついてたらこんな時間になったんでな。んで来てみたらお前が見えたからな」
顔を背けながらそんな事を言う。みなにそれが嘘だと解るそれは彼の癖だからだ。
しかも学生服のままだった。みなづきで無くても解る。
きっとずっとを待ってくれていた。
「……それとほら」
そう言って彼はみなづきに紙袋を渡した。
その中には、
「わぁ、あんまんだよぉ！」
「んだよ。大袈裟だな。ん、ちょっと冷えてるかもな」
自分の分をかじりながら彼は呟く。
みなつぎも一口かじる。
「ううん。凄く暖かいよ」
「そうかぁ？」
「うん！」
だって、それは外でずっと待ってくれていたって事だから。
「ありがと～こうちゃん！」
「……早く帰るぞ風邪引いちまう」
「やっぱりこうちゃん、大好き――だよっ」
「げっほっ！突然な、なに言ってんだよ！」
顔を真っ赤に顔を背ける優しい幼なじみを見て、姫野みなづきは

昔から変わらない想いを、自分の気持ちを再認識したのだった。

Ｅｓｓｅｎｃｅ３「憧れるだけの存在だけだ」

Ｅｓｓｅｎｃｅ３「憧れるだけの存在だ」

あの後、特に何の問題も無く帰宅した訳だが……

「ねぇ。こうちゃんは夕ご飯何が良い？」

私服に着替えて我が家のように居るみな。なんか気恥ずかしいな。

「余りモンで何か作れないか？　ていうかカレー余ってねぇのか？」

「うん。あんまり量作ってなかったからね……この材料なら肉じゃがとかどうかな？」

「おお……いいな！」

「うん！　じゃあ早速」

鼻歌混じりに料理を始めるみな。俺は手伝うなと言われてるしな……

つーかこの状況マジで同棲みたいなんだが。

「とっ。そうだこうちゃん。台本！」

「あ？」

何の事だ？　と言いかけ、そういや恭二の奴に渡されっけと思い出す。

「けっこう長いから見ておいた方が良いと思うな～」

「……仕方ねぇな」

「出来たら呼ぶね～」

そんな声と、包丁のリズミカルな音に背後に俺はリビングを出た。

「……」

俺の手に握られてるのは台本。今改めて見ると分厚いぞ。ずっしりだ。

「さて……」

台本を開きとりあえず流し読みしてみる。

『昔ある王国に美しいお姫様とその王国に仕える勇ましい騎士が居ました。二人は愛し合っていましたが、身分違いの恋……王様に認められ筈がありませんでした。こっそりと逢う事しか出来なかったのです。

そんなある日、お姫様は悪い魔女に連れ去られてしまいます。姫の連れ去られた場所は極東の城でした。王様は姫奪還の任務を発令しますが、その旅路は険しく生きて帰れるか分からない上強大な力を持つ魔女が居ます。誰も志願する者がいない中、あの騎士がその任務を請け負うのでした。

彼は苦難の旅を始まるのでした。

第一部終わり』

「お遊戯かよ……」

本当にこてこてだ。しかも第一部って、第二部まであんのかよ……

俺はげんなりしながら、台本を閉じる。流石に全て読む気力は無い。

「……身分違いの恋か」

だったら諦めろよと、俺は思う。いくらお互い好きでも相手が不幸になったら意味が無い。釣り合ってなければ……駄目なんだ。

届かない場所に手を伸ばしても腕が痛いだけだ。

憧れるだけの存在……それでいいだろ？

「って何感情移入してんだか……」

馬鹿馬鹿しいと俺は首を振る。

『ご飯出来たよぉ～』

そんなみなの声。夕飯が出来たらしい。

「憧れるだけの存在だけだってのにな」

俺は再び頭を振り、部屋を後にした。

リビングに戻ると既に夕飯が並べられていた。
肉じゃがに、焼き鯖（そういや余ってたっけ）、ほうれん草の胡麻和え……完璧だ。
光って見えるぜ。
「早く食べよっ、こうちゃん」
「ああ」

『いただきます！』

「美味い！」
肉じゃがのジャガ芋は勿論煮崩れはしていない。ほっくほくである。
個人的にはマヨネーズをかけたらもっと美味いんだけど、やるとみなは怒る。
鯖の塩加減も最高だ。俺がやると塩辛くなんだよな。
胡麻和えは醤油が良い感じに染みて美味い！　飯が進む！
「美味しいね！」
そう言って満面の笑顔。
「お前って笑顔眩しいよな」
「ん……そうなの？」
「サングラス掛けないと直視出来ないぐらいな」
「物理的になの！？」
「停電の時頼むな」
「私は災害用のライトなの！？」
俺がボケればみなは突っ込んでくれる。
「そっか……じゃあ私が居れば安心だねっ」
「本気にした！？」

結局俺が突っ込むんだけどな……
「あ～そういや。お前何処に寝るんだ？」
気になっていた事を聞く。みなは今日から俺ん家に泊まる訳だからな。
流石に、誰も居ない家に帰す訳にはいかないしな。
「こうちゃんの部屋」
鼻から、ご飯が逆流した。いや液体じゃなくて固体がだぜ？　それぐらいびっくりした。
「ごぼっ、がばぁ！？　ぐあああああああ！！」
「どうしてそんな、急所当たり（クリティカルヒット）を受けて即死しちゃったみたいなリアクションなの？」
ショック状態からようやく復活する。
「冗談だよな？」
「本気――だよっ？」
「……駄目に決まってんだろーが！」
「ええ～何でぇ？」
本気で首傾げてやがる……見かけの割りにはコイツの精神は子供なのだ。
「男女が同じ部屋ってマズすぎだろ。ここ暖房使っていいから、ここで寝ろ。布団敷くから」
「むぅ～。一緒に寝たいよ～」
「言っておくけどな、これだけは譲らないぜ」
みなには自分が女の子って事を自覚して欲しい。間違いあっちゃいけないんだ。
「……うん。分かった」
渋々と言った様子でみなは了承した。
「じゃあ俺片付けやるよ。流石に何もしないってのは嫌だしな」
「……うん」
皿を持って流し場に向かう。
「こうちゃんになら、別に間違いがあっても良いのに……」

呟かれたみなの声は俺の耳には届かなかった。

「……はぁ」

何故だが気まずい雰囲気になったので、片付けが終わると俺は部屋に退散した。

「……ん？」

浴室の方で物音が聞こえた。

「風呂か……」

みなが風呂に……

最近胸が更に成長しているような……あの瑞々しい肢体は本当に中学生なのかよ。

はっ！

駄目だ駄目だみなの裸駄目だえろい駄目だよな考えるな触って心頭滅却みたいよな心頭滅却俺の股間が心を無に心を無に！

……

あの後、必死に説法や読経を読み上げ無理矢理心を落ち着かせた。

人間色々やってみるもんだぜ。

もはや俺の心は青空の如く澄み渡ったている。何でも来いだぜ！

「こうちゃん～牛乳貰っていい」

そんな声と共にがちゃりとドアが開く音。

何と言うか、素っ裸の女神様が居た。

ビーナスだよビーナス。ほら、あの痴女だよ。

ふっ。俺は既に悟りを開いている。平然とした対応が、

「■☆§〇∞（何だよみな」

「何？　その古代言語？」

「出来る訳無いだろーが！！この馬鹿っ！」

思わず現代語を忘れちまってたじゃねーか！
俺は真っ赤になりながら、怒鳴る。
「ひゃっ！？」
流石に驚いたみなはそんな声をあげる。
「せめてバスタオル巻いてこい！　オッサンかお前は！？」
羞恥心無いのか！？　コイツは！？
「え？　でも、私家ではいつもこうだよ？」
「ここは俺ん家だぁぁー！！」
近所に俺の魂の叫びが響き渡った。

「……はぁ」
あの後、何とか収拾を付け俺も風呂に入る事が出来た。
アイツの羞恥の無さには驚きだ。
「……そういや、ちょっと前までみなが入って……」
ぶんぶんと音が鳴る程首を振り妄想を吹き飛ばす。
風呂上がり。寝巻に着替え牛乳を飲む。
「……ん？」
リビングから穏やかな寝息が聞こえて来た。
「……寝てるのか？」
そう小声で言うが返事は無い。リビングに行くと電気が点いているのにも関わらず、みなはぐっすりソファーで眠っていた
「……疲れてんだな」
最近は、文化祭が近い為忙しい。人一倍いや、人十倍働くみなは本気で疲れていたのだろう。
今日だって遅い時間まで残っていた。それなのに、俺の夕飯まで作って……
「……ホントに馬鹿だよ。お前……」
布団を敷き、起こさないようにみなを持ち上げる。
軽いな……

ゆっくりと布団に寝かせる。毛布と布団をかける。
暖房はタイマーにして、
「こうちゃん……」
「……みな？」
起きたのかと思ったが違う。みなの瞼は閉じられたままだ。
「……寝言か」
ふとみなの寝顔を覗いて見る。
美しい共、可愛い共言える整った顔。見慣れた筈なのに俺は相変わらず直視出来ない。
それほどみなは綺麗だ。
「……俺は」
ずっと前からみなの事……
「……」
頭を振り馬鹿な考えを振り払う。
「おやすみ、みな」
そう呟き、俺は部屋に戻った。ベットに寝転ぶ。
仰向きに天井を見詰める。
そして、目をつむる

『キミの名前は？』
男の子は、女の子に話しかけた。寂しそうで悲しそうだったから。
『……みなづき』
『みなづき……なんだかキレイな名前だね』
男の子は素直な感想を言った。女の子は少し、驚いた。
『……私、――だよ？皆――――悪いって』
『ボクはそんなの気にしないよ！　遊ぼう？』
『私、でも……』

『ほら、早く！』
男の子は女の子の手をとった。
『……！』
一瞬驚き、嬉しそうに女の子は笑った。
『うん！』
男の子も笑った。二人は笑い合っていた。
そんな遠いユメ。

Essence4「練習開始だよっ」

Essence4「練習開始だよっ」

朝。俺とみなは並んで登校だ。自然と俺の隣にはみなが居る。なんつーか、慣れてきた俺が嫌だ……

「こうちゃん、劇の台詞覚えた？」

そんな俺の心情など露と知らないみなは、そんな事を聞いてきた。

この俺が覚えてる訳ねーだろ……

「……無理。一日じゃあ不可能だよ」

あのボリュームじゃあ一週間かかる。

「私は覚えたよ？」

「お前と一緒にするな……」

みなは異常に記憶力が良い。一度見た事は絶対に忘れない。

みな一度読んだ本の内容は忘れないし、全校生徒の名前と顔全て覚えている。

１０年に、いや１００年に一人の天才。

とか何とか言いやがる奴も居るが……

「どうしたの。こうちゃん？　私の顔に何かついてる？」

「いや……」

俺から見れば可愛いただの女の子だと思う。

基本的に一周回って馬鹿なんだろうな。

「相変わらず綺麗だなと思ってな」

「ふぇ！？」

顔を真っ赤にしてあわあわと慌て出したみな。

「あの、えっとその……ありがと……えっとこうちゃんも可愛いよ？」

「何でそうなるんだよ？　ほら、行こうぜ？」

「う、うん！　えへへ……」
本当。こーゆう所は普通の女の子だよな。

「今日の連絡をする……はぁ。今日から文化祭準備期間なので４５分授業だ……はぁ」
何故か、陰惨とした様子の、負のオーラを纏っていた担任の篠崎（独身）。とんでもなく欝陶しいが、何があったんだ？
「保健の平河先生にアタックして玉砕したらしいよ」
と、隣の席の恭二が教えてくれた。
まぁ、確かに美人で優しい平河先生とじゃ無理があるわな。
心の底からどうでもいいけど。
「と言う訳で１時間目は自習だ……」
１時間目は公民（篠崎の授業）だ。
「先生は？」
「先生は、ちょっと泣いてくる……」
公私混同し過ぎだこのクソ担任。
「と、言う訳で……」
そんな事を言って篠崎は出ていった。その眼に光るモノが見えたが俺は見なかった事にした。
「さて……寝るか」
理由はどうであれ自習！それは、堂々と眠れる最高の時間！（スイートタイム）
「駄目だよ。こうちゃん」
「駄目だよ？こう」
「駄目よ。屑」
みな、恭二、小野の強襲。だろーと思ったよ、畜生！
あれ？　俺ナチュラルに屑扱いされてなかったか？
「文化祭の話し合いだよ？」
「劇も練習もね」

「死になさいよ」
はぁ……仕方ないな。クソっ何で俺が……
あれ？　俺ナチュラルに死ねって言わなかったか？
「くたばりなさいよ」
あれ？　俺ナチュラルに……って！
「三回目は流石にスルー出来るか！　俺に喧嘩でも売ってんのか小野ぉ！？」
そう俺が叫ぶと、小野は心の底から蔑んだ視線を浴びせて来た。
「はぁ！？　喧嘩ぁ？　何言ってんのよ。害虫なんかに喧嘩売る訳無いでしょ？　悔しいなら、せめてみなづき様の益虫になってからモノを言いなさい！」
胸を張り傲慢に言い放つ小野。
こ、このアマ……言ってくれんじゃねぇか！？
流石の俺でもキレるぞ。
「上等じゃねぇか……！二度とその舐めた口――ぐぺっ！？」
こきり。
と言う軽快な尚且つ、ヤバ気な音と共に俺の頭が強制的に右を向いた。
「喧嘩は駄目だよぉ！こうちゃん！」
どうやらみなが喧嘩を止める為に俺の首を捻ったらしい。
そう冷静に状況判断した直後、
「はぁぁぁぁー！？　首がぁー！？」
首にとんでもない激痛が走った。
いや、何これマジでいてぇ！　シャレになってないぞ！　これ！
「瑞歌ちゃんも駄目だよ？　こうちゃんは傷つき安いんだから」
色々ツッコミたいが痛くて、ソレ所じゃない！！
「ああん……ごめんなさいみなづき様ぁ」
みなに叱れて身をくねらす小野……謝るのはみなにじゃないだろ……いやそれどころじゃなくて、俺の首はまだリアルに痛む！！
「みなぁ！　俺を殺す気かぁ！？」

「ほら、瑞歌ちゃんも、こうちゃんも、お互いにごめんなさいだよ？　そうすれば仲直りだよ」
「う」
「う」
「仲直り――だよっ」
仲直りもなにも、そもそも俺は何もしてないぞ……
だが、みなのそんな笑顔見せられたらなぁ。
「ちっ。みなが言うから謝るんだぞ」
「ちっ。みなづき様がおっしゃるから謝るのよ」
小野と声が重なった。舌打ちのタイミングまで同じだった。
「俺は悪くないが、仕方なく謝るんだ」
「私は悪くないけど、仕方なく謝るわ」
またも同時、そんな俺達を見て恭二は、
「ひょっとして二人って仲良い？」
にやにやしながらそんな事を言いやがった。
「んな訳ねぇだろ！！誰がこの変態女と！」
「んな訳無いでしょ！！誰がこの蛆虫野郎と！」
とんでもねぇ！　言って良い冗談と悪い冗談があるぞ！
「って誰が蛆虫だ！」
「誰が変態よ！私の崇高なみなづき様への愛を欲情と一緒にしないで！」
「喧嘩は駄目ぇー！！」
ごきり。
「ごぺ！！」
今度は、左……何で俺ばっかり……
あれ、今度は痛く無い？
いや寧ろ、感覚が？
「あれ？　こうの口から魂みたいの出てない？」
何だか空に昇っているような開放感。
俺……飛んでるよ……

「わわわ、こ、こうちゃん！？」
そんなみなの声を聞きながら俺の意識は闇に落ちた。

「あー……まだ首が痛ぇ」
「ご、ごめんね。こうちゃん」
よく覚えてねーけど、生死の淵をさ迷ってた気がするぞ。
「全くだらし無いわね」
心底呆れたような声の小野。誰のせいだと思ってやがる。
「台本には目を通してるの？」
と恭二。
「ああ。一応な。ところで恭二。お前は何役なんだ？」
「僕は出ないよ？」
「てめぇ。表出ろ」
「喧嘩は駄目だよ？」
「……小野は？」
「私は魔女役……はぁ。騎士様役やりたかったわ。ああ、みなづき様との禁断の愛……うふふふふ」
「……確かに魔女だな。似合うじゃねーか」
「殺すわよ？」
「まあまあ。小野ちゃん。とりあえず、こうは台詞を覚える所からだね」
「自信ねぇな」
「今日中に覚えなさい」
「無理に決まってんだろ」
「これだから虫は……」
「小野……てめぇな……」
「ほらほら。喧嘩してる暇あったら覚える。小野ちゃんも全部は覚えて無いでしょ？」
「まぁ……そうね」

「人の事言えないじゃねーか」
「五月蝿い」
「ふ、ふふふ」
「？　何笑ってんだ？　みな」
急にクスクスと笑い出したみな。
「だって、嬉しくて……ふふっ♪」
「はぁ？」
「こうちゃんが楽しそうにしてたから」
「俺が？」
「うんっ！」
「……」
「皆で何かをやるって楽しいよ～」
確かに悪くは、ない。
「……ふん。最後だからな」
「……最後じゃないよ」
俺の言葉をみなは否定した。
「……」
「これからも――だよっ！」
「……っ！？」
その台詞を聞いた後、俺を席を立った。
「こう？」
「……文化祭までだ。俺たちが仲良くすんのも」
「ち、ちょっとアンタ！　突然何言ってるのよ！」
「いつまでも仲良しごっこ何てやってられるか。くだらねぇ」
「こうちゃん……」
みなのすがるような声。
俺はみなの顔も見ようともせずに、教室の出口に向かって歩き出した。
「何処行くのよ！　授業中よ！」
「トイレだよ。我慢出来ねーんだよ」

そう言って俺は教室を出て行った。後ろから小野の声が聞こえたが無視した。

廊下を歩きながら、俺は

「いつまでも……一緒に居れる訳ないだろ」

そう呟いた。

Ｅｓｓｅｎｃｅ５「名前で呼ぶの恥ずかしいし」

Ｅｓｓｅｎｃｅ５「名前で呼ぶの恥ずかしいし」

屋上。本来立ち入り禁止だが、窓が開いているから簡単に入れる。サボるにはうってつけの場所（スポット）だ。

冷たい風が吹く。１１月下旬の風は冷たい。

『最後じゃないよ』

みなの言葉が頭の中で反響する。

同時にみなの笑顔も浮かんでくる。

『これからも――だよっ』

「……っ！」

思わずフェンスを殴りつける。がしゃんと。誰も居ない屋上にそんな音が響く。

「……無理だろ。だって、お前は」

「なーにやっちゃってんのよ」

「……！」

突然響いた声に俺は振り向く。視線の先には、

「フェンス、壊れたらどうするのよ？　弁償よ弁償。アンタみたいのに払える訳？」

心の底から呆れたような表情の小野が居た。

「お前……？」

何でコイツが屋上に？

意外過ぎる人物の登場に俺は言葉を失う。

「全く……これで私も校則違反よ。どうしてくれるのよ？」

「……何の用だよ」

ようやく、それだけの台詞を口にした。

「授業中飛び出した奴が居たら委員長として放っておける訳無いで

しょうが。トイレなんてバレバレの嘘ついちゃって」
あからさまにため息をつきながら、小野は言った。
「……お前もサボってるだろ」
「うっさい。委員長は良いのよ！　それで、何があったのよ？」
「……」
「言わないなら、ここから突き落とすわよ」
「殺人犯が居る！　ここに殺人犯が居る！」
「アンタ人じゃないでしょ？　殺虫よ殺虫」
「喧嘩売ってんのか……？」
何なんだコイツ？　屋上までわざわざ喧嘩売りにきやがったのか？
「ま、本音は置いておくとして」
「冗談じゃねーのかよ！？」
いや、怒るを通り越してヘコむぞ……何でそこまで虫扱いされなきゃいかんのだ。
「本当、何があった訳？　どうせみなづき様の事なんでしょ？」
見透かされた。いや、もしかするとバレバレなのかも知れない。
みなの事でコイツに嘘をつける筈が無い。
「お前には関係ねーだろ。委員長面して説教か？　うぜぇコトしてんじゃねぇよ」
自分でも嫌になるほど程の強がりだった。
「アンタの事は心の底からどうでもいいわ」
俺の精一杯の強がりを遮るように小野はそう言った。
「……あ？」
「アンタがそんなだと、みなづき様が沈んじゃうのよ。あのお方は向日葵のように微笑んでおられるべきなのに……」
そう言いながら小野は俺に歩み寄ってくる。
お互いの息がかかる程の近い距離。
思わず心臓が高鳴る。
「……！」
「だからとっとと話す！」

小野は真剣な表情で俺の目を覗き込んでくる。
絶対に嘘はつかさせない。そんな意思の籠もった目だ。
そんな表情に俺は目を逸らし、
「……俺とみな、お前から見てどう思う？」
そう、振り絞るようにそんな質問した。
「……。向日葵と害虫」
「真面目に答えてくれ」
小野の軽口に俺は真剣な口調で言った。すると、小野は少し考えて、
「……非常に悔しくて忌ま忌ましいけど」
心の底から忌ま忌ましそうに、
「アンタとみなづき様……恋人みたいに仲良く見えるわ」
そう言った。
「アンタと居るみなづき様は幸せそうだし、アンタも」
「俺も？」
「アンタもよ！　やけに楽しそうにして、ムカつくのよ！」
何だ？　今度は逆切れされたぞ？
「……そっか。そう見えるか」
俺は、そこまでアイツの事を。
でも、俺は……
それでも俺は。
「殺したい程憎らしいけどね」
そう言いながらそっぽを向く小野。
もしかすると、小野なりに心配してくれたのかも知れない。
「……ありがとな。小野」
「？　何で御礼なんか言うのよ」
「気ィ使ってくれてんだろ？　だから、ありがとう」
「……！？」
そう俺が言うと、小野は何か有り得ない物を見たと言わんばかりの表情になった。まるで、宇宙人が流暢な関西弁を喋ったのを見た

ような、そんな表情。
何だ？　俺が何かしたか？
「……な、何だよ？」
「い、いや。アンタって笑うのね……」
「ん？　……俺笑ってたか？」
自覚して無かったんだけどな。無意識か？
「き、気持ち悪っ！」
ストレートに言い過ぎだ。流石に傷つくわ。
「んだと！　俺だってたまには笑うだろ！」
「……うげぇ」
「本気で気持ち悪くなってんじゃねーよ！　いい加減泣くぞコラ！！」
言ってて、情けなくなってくる。
ちなみに、若干涙声なのは秘密だ。
「うるさいわね……ちぎるわよ？」
「何処を！？　何を！？」
こえーよ！　マジでこえーよこの女！　つーかコイツ本当に女か！？
「まぁ……本音は置いておくとして……」
「やっぱり冗談じゃねーのかよ！？」
「……誤魔化そうとせずに本当の事、言いなさいよ」
これは、まだ恭二にも話していない事だ。
まだ、決心がつかない。
「……誤魔化して悪い。でもな、まだ言えない」
「まだ？　それって、いつか話すって事？」
「……」
有無を言わさない、と言わんばかりの小野の表情に俺はしばらく考える。
参ったな……約束しないと本当にここから突き落とされそうだ。
「分かった。時が来たら絶対に話す。約束する」

「言ったわね？　約束よ。破ったら本当に殺すわ」
「ああ」
恐らく、本気の小野に俺は茶化さずにそう言った。
「絶対、話しなさいよ？」
「ああ。約束するよ。小野」
そう俺が言うと何故か、不満げな表情を作る小野。
「？　何だよ。小野」
「前から気になってたんだけど……その小野って言うの！」
「！？」
再び、俺に顔を近づける小野。
だ、だから近いって！
「瑞歌って呼びなさい！　私だけ何で名字なのよ？　三年間も同じクラスに居てどうして私だけ他人行儀なのよ！」
「は、はぁ！？」
な、何でそんなに怒ってるんだ？　そして、何でそんな話になるんだよ！？
「え、いや。だって」
「何？　何か理由でもある訳？」
り、理由？　いやだって、そうじゃね？
女子だぜ？　ふ、普通さ、そのえっと。
「……いや…その女子を名前で呼ぶのって恥ずかしいし……」
「……」
俺がなんとかそう言うと、小野は一瞬何を言われたか分からないような表情をし、
「……っぷ、くくく」
「え、え～と」
「ぷくくく！　あ～はははははははははははははははは！」
大爆笑された！？
「ば、馬鹿……ふふふ本物の馬鹿が…あはははは！」

「う、うるさい！　一応思春期なんだよ！　畜生！」
やっべ。人生で一番恥ずかしいかも知れないぞ。
「は、恥ずかしいって、ぷぷぷ、アンタみたのが、ぷぷぷ、いやマジ面白、あ～はははははははははははは、ほ、ホントに笑い死にしそう、ぷぷぷはははははははははははははははははははははは……」
文字通り笑い転げる小野。
「いい加減にしろぉぉぉー！」
屋上に小野の笑い声と俺の叫び声がしばらく続いた。

「いや～笑った笑った。今年一番笑ったかも」
笑いすぎて泣き声の小野。
小野の笑いはチャイムが鳴ってようやく収まった。
くそぅ。俺は今年一番の心的外傷（トラウマ）だよ。
「とっと教室に戻れよ。チャイム鳴っただろ。小野」
「瑞歌」
「ぐっ」
楽しんでる！　絶対楽しんでやがるな。コイツ！
「いや、だからな小野」
「瑞歌」
「とっと失せろ！　み、瑞歌！」
「はいはい良く出来たわね～」
嫌らしい表情をしてそんな事を言いやがった。
飛び降りてぇ！　今すぐフェンスを越えて空にダイビングしてぇ！
「意外と可愛い奴なのね。ぷぷぷ」
再び噴き出しそうになる小野、いや瑞歌。やべぇ地の文でも恥ずかしいぞコレ。みなの場合は、慣れてるからなんだろうな……
「じゃあ、先戻ってるわよ。約束忘れないでよ？」
「分かってる」

あまりの衝撃に忘れそうになったわ。
「そして、帰ってきたらみなづき様に謝る事。そして私を瑞歌って呼ぶ事」
「待て！　あいつ等の前で呼ぶのか！？」
「そうよ？　頑張りなさいよ？　こうちゃん」
「～～～～～～～！！」
俺が何か言う前に、瑞歌はさっさと屋上を出て行った。
「はぁ……」
重苦しい溜息を吐く。もういっそ誰か殺せって感じだ。
「……でも、まぁ」
認めたく無いし、非常に忌々しいが、
「少し、楽になったか」
そう俺は呟くのであった。

Essence6「完璧な微笑み」

Essence6「完璧な微笑み」

「……」

俺は教室のドアの前で佇んでいた。と思えば、うろうろと行ったり来たりしている。端から見れば奇異な光景だろう。

何故俺がそんな奇行に及んでいるのかと言うと。

（気まずい……）

なのであった。口喧嘩をして出て行った訳では無いのだが、急に教室を飛び出した事には変わり無い。

みなに会うのがとんでもなく気まずい。

どんな顔で会えば言いのか……何て言えばいいのか。

小野……じゃなくて瑞歌には謝れって言われたが……

「……ぬぅ」

決心がつかずこうした奇行に及んでいる訳だが。

いつまでもこうしている訳にはいかない。視線も痛くなってきたし……

「……」

決意を固め、ドアに手をかけようとすると、

がらりと。

ドアが開いた。

「……！」

「……ぁ！」

そこに居たのは、何を隠そう姫野みなづきさんだった。

意を決してドアを掴もうとした手を空を切り、俺は奇妙なポーズを決めるハメになった。

「こ、こうちゃん！？」

みなも驚いていた。ドアを開けると俺が居たからか、俺のポーズに見惚れたか。いや後者は無いな。
「あ、ああ……いや」
こちらも、思っていない遭遇（エンカウント）だ。不意打ちだ。
俺は混乱している！
「えっと、こんばんはみな」
Ｍｉｓｓ！　何言ってんだ俺は！
「えっと、まだ朝だよ？」
みなづきの反撃！　冷静に突っ込まれてしまった。
「あ～えっとだな……」
「んと……その」
お互いしどろもどろだ。クソッ。こうなったらとりあえず謝ろう。
「ごめん！　みな！」
「ごめんね！　こうちゃん……」
言えた！　……ってアレ？
「いや……何でみなが謝るんだよ？」
「え……どうしてこうちゃんが謝るの？」
お互い何か噛み合っていない。みなが謝る事なんて一切無い筈なのに。
「私……こうちゃんが怒るようなコト言っちゃったんだよね？……だから教室から……」
「……」
とんでもない勘違いだ。いや、昔からみなはそうだ。
そう言えば、そうだった。
他人を決して悪者にはしない。相手を怒らせたり、不快にさせたと思ったら自分のせいと彼女は思う。思い込んでしまう。
みなの悪い癖だ。譲れる所まで譲ってしまう。そんな事をしていたら自分の居場所が無くなってしまうのに、だ。
「……お前は悪くない」
「……でも！」

「いいから！　そーゆう事にしとけ。たまには謝らせろよ」
「……」
泣きそうな表情のみな。
そんな表情に、俺は自分を殺したくなる。
俺はみなにそんな表情をして欲しく無い。いや、させてはいけないのに！
「……急に出て行って悪かった。ごめん」
そう言って俺は頭を下げる。
「でも、でも……」
それでもみなの表情を変わらない。
仕方ない……酷く気も進まないし、恥ずかしいが、
「……おお、姫様。かのような沈んだ表情は貴方には似合いませぬ」
「え？」
一瞬何を言われたか分からない表情になるみな。
「あ……」
しかし、すぐに気付いたように今度は驚いた表情を作る。
そう、これは劇の台詞だ。少しだけ覚えていた。
「太陽のように微笑んでおられるべきです。どうでしょう？　気晴らしとして、私と踊っていただけませんでしょうか？」
そう精一杯、格好つけて、キザにそう言った。
「……」
……やべぇ。外したか？　ぶっちゃけ周りに人が居なかったからいいものの、見られてたら本気で学校をしばらく休校する羽目になったところだ。
「ぷ……ふふふ」
あれ？　このパターン……概視感（デジャブ）なんだけど……
「ぷ……ふふふ、こうちゃん……すっごく似合わないね」
瑞歌と違い、大爆笑はされなかったがみなに笑われてしまった。
……みなに笑われてしまった。ショックだ。死にてぇ……
「……悪かったな。どーせ似合わねーよ」

「でも……格好よかったよ？」
「……」
やべー。俺の顔、真っ赤になってないか？　若干嬉しくなってるのは気のせいか……
「こうちゃん……本当に優しいよね」
「そんな訳……」
「優しいよ……こうちゃんは」
俺の言葉を遮るように、みなそう言った。
「文化祭、頑張ろうねっ！」
そう言ってみなは微笑んだ。
美しい完璧な微笑み。
誰もが人類であれば、いや生物なら見惚れそうなそんな微笑み。
「……ああ」
美しくて、綺麗で、そして遠い。傍に居る筈なのに、こんなに遠い。
星に手を伸ばす事と変わりは無い。
俺と彼女は、こうも違う。
俺と彼女は、こうもすれ違う。
俺は彼女の隣に居てもいいのか？
俺に彼女の隣に居る権利があるのか？
その言葉は数年前から俺を蝕む。毒のように鉛のように重く。
完璧なみなに俺は、ずっと……
「こうちゃん？」
「……っ！？」
みなの呼び掛けに俺は正気を取り戻す。
「どうしたの？」
心配そうに俺を覗き込むみな。心臓の高鳴りを悟られないように、みなから離れる。
「いや、大丈夫だ。さぁ、教室入ろうぜ？」
「う、うん」

みなは、戸惑っていたが俺が教室に入ると、みなもそれに続いた。
今は、忘れよう。少なくとも今は一緒に居られる。
いつも通りに。
現実を先延ばしにしているだけと分かっていても、俺はそうせずには居られなかった。

『ねぇ……けっこんってなぁに？』
少女は勿論問いの答えを知っていたが、少年がなんと答えるか気になったので少年に聞いてみたのだ。
『けっこんは、すきなひとどうしがするんだって』
『じゃあ、私たちもできる？』
『うん！　できるよ！　きっと』
『じゃあ、おっきくなったらしようね？　やくそくだよ？』
『うん！　やくそく』
少年と少女は無垢に笑い合う。その『やくそく』は……

Essence7「キタローみたい」

Essence7「キタローみたい」

「私をここから連れ去ってくれませんか？」
「え～と、確か……騎士たるこの身、王の意思を背く訳にはいきませぬ……だっけ？」
「最初の申し訳ありませんが抜けてるね。じゃあもう一回」
放課後。俺達は劇の練習をしていた。恭二と瑞歌も残っている。
「でも、意外だなぁ。こうから進んでやりたいなんて」
爽やかな笑顔を浮かべて大人になったなぁとか呟く恭二。
俺の親かよ……お前は。
「せいぜいみなづき様の役に立つよう頑張りなさいよ」
「うるせーよ！　余計なお世話だ……小野――」
「瑞歌よ」
「うっ……瑞歌」
「よろしい」
「仲良しだねぇ～」
「うっせ。何処がだよ」
とか何とかやっていると。
「おっ。もうこんな時間か」
時刻は既に5時半。日が傾き始める時間帯で下校時間でもある。
「みな。今日は文化委員の仕事は無いのか？」
有るなら居残り確定な訳だが……
「うん。無いよ。一緒に帰えろっ」
「……仕方ないな……」
言いながら席を立つ。
結局…こうなるのか。満更でも無い自分が嫌だが……

「……！」
「小野ちゃん。その視線本当に人殺せると思うよ」
帰り際、背後からとんでもない殺気を感じたが俺は敢えて気付かないフリをした。
……明日が恐い。

帰り道。隣にはみな。端から見ればどんな感じなんだろうか……
「こうちゃん」
「ん。何だよ？」
「前から気になってたんだけど……右の髪伸ばし続けてるよね？右目見えるの？」
「ああ。馴れればな」
俺の髪は確かに男のわりには長い。敢えて右の髪は切っていない為、右目にかかっている。
「キタローみたいだよねっ」
「キタロー言うな」
まぁ……確かにキタローヘアーなんだけどな。別にオシャレとかじゃない。髪の中に親父さん居る訳でも無い。
傷を隠す為だ。事故で受けた傷。額から右目にかけて大きな傷がある。失明しなかっただけ儲けモンだが、傷痕はしっかり残った。
「隠す事無いのに……」
「見せたいモンでも無いし、恐がられるしな」
実際、俺の傷見て泣いた子供居るしな。
「そんなコト……」
「いいんだよ。何気に気に入ってるし」
「キタローみたいなのに？」
「だからキタロー言うな」
「おいっ。キタロー！」
「似てねぇ！」

目玉の親父さんの物真似がここまで似ない奴は初めて見た。甲高く言えば普通似るだろ……
「頑張ったのに」
「んな頑張りいらねーよ」
「？　こうちゃんは髪の毛は飛ばせるの？」
「不思議そうに首を傾げながら聞くな！　出来るか！　ていうか出来たらソレ人間辞めてるぞ」
「流行語大賞おめでとっ！」
「確かに取ったけど！」
あれドラマだし、流行ったの奥様方だし！
「そういや、恭二は全部見た言ってたな……」
何故……学生では見れないだろ。９時と１１時からだろ？
「うん。お姉さんが好きだからって」
「……あの人が？」
あの人が？　ヤンキー映画しか見ないようなあの人が。
「ぶっ……」
「笑っちゃ失礼だよ？」
「い、いや、だって……」
現役時代本気で他校に殴りこ　みかけてた人だぜ？
漢の道を女の身で突き進むような人だぜ？
「報告しちゃうよ？」
「止めろ。俺が殺される」
笑いが消し飛んだ。喧嘩であの人に勝てる人類なんか居ないんだからな……
「俺の首が３６０度曲がってもいいのかよ」
「一回転しちゃうんだ……」
小学生時代に何回も殺されかけたからな。トラウマモノだ。出来れば二度と会いたくない。
そんな事を話している間に家に着いてしまった。家と学校はそこまで離れていないのだ。故に自転車登校が出来ない訳だが。

「ただいまっと」
「ただいま～」
我が家のように入ってくるみな。着替えとかもウチに持って来ている。
なんかもう……もういいや。文句を言っても状況が改善される訳じゃないしな。
早速我が家のように着替え始めるみなって。
「ちょっと待て！　俺が居る事忘れんな！」
「？　忘れて無いよ？」
「だったら着替えを止めろ！　スカートを脱ぐなぁ！」
慌てて目を逸らしながら自分の部屋に退散した。

数分後。私服に着替えた俺達はキッチンに居た。
「夕飯はどうすんだ？」
「うーん……どうしよっか？」
冷蔵庫を開けて中身を見る俺達。
「なんも無いな……」
「無いね」
かと言って買い物行くのは面倒だなぁ……
「なんか作れる？」
「流石に厳しいよぉ～」
「頑張れ」
「梅干しと雑炊なら……」
「よし、買い物行くか」
背に腹は変えられない。仕方ないので俺達は買い物に行く事を決めた。

Essence8「詩歌ちゃんなのです」

Essence8「詩歌ちゃんなのです」

風賀街（ふうがまち）の商店街。かの有名な「コズミニック24」（店名変えろや！）もここに有る。俺やみなはここの常連だ。ゲームセンターや古本屋等も有る為人も賑わっている。夕方な為夕飯の買い物客も多い。

「あ。こうちゃん。本屋さんに寄っていいかな？」

「ああ。いいぜ」

「よかったぁ。買いたい本があったの」

「本好きだよなぁ。お前」

「うんっ。大好き！」

以前みなの部屋に入った事があるが沢山の本が並んでいた。哲学の本（難しそうな本は皆そうだと思っている）や文庫本。更にライトノベルに至るまで埋め尽くされている。

一度読んだら覚えてしまうだけあってすぐに新しい本を買ってしまうらしい。

最寄りと言うかみなの行きつけの本屋『静木』に入る。

本の匂いがじめっと漂ってくる。戦前から開いてます感溢れる古い店だ。

「じゃあこうちゃんちょっと待っててね」

「ああ」

奥の方に消えていくみな。俺は辺りを見渡す。

「しっかしよく読めるな……こんな文字だらけの本……」

俺だったら一分も持たないだろうな。すぐに眠くなる。

「……うぅぅ～～」

「ん？」

聞き覚えの有る声に眉をひそめる。その方向に歩いて見る。
「本が……取れないです～」
小学生低学年くらいの可愛いらしい女の子が、ぴょんぴょんと跳ねていた。ポニーテールが跳ねる跳ねる。
「何やってんだ？」
「！！」
びくりとしてこっちを見る女の子。そしてすぐに俺だと気付いたようだ。
「あっ！　こうちゃんおにいちゃんです！」
そう言って駆け寄ってくる女の子は確か……
「詩歌（しいか）ちゃんだよな？」
「はいっ！　しいかちゃんなのです！　こうちゃんおにいちゃん！」
俺の事をそんな長ったらしい名称で呼ぶのはこの街広くともこの子しか居ない。
小野詩歌。名字から分かるかも知れないが瑞歌の妹である。
迷子になっていた時、助けたきっかけで知り合った訳だが、あの瑞歌の妹だ。あの変態の妹だ。その為初めてそれが分かった時は身構えたが、接していく内に純粋で良い子だと言う事が分かった。
姉とは大違いだ。
「久しぶり。こうちゃんかお兄ちゃんどっちかにしないか？　長いだろ」
「こうちゃんおにいちゃんはこうちゃんおにいちゃんですからっ。こうちゃんおにいちゃんなのです！」
「読者が読み辛いだろ？」
「なにを言ってるのですか？」
「さぁ……俺にも分からん」
「相変わらず変なおにいちゃんです！」
「……。それで何してたんだ？」
「お夕飯を買いに来ました」
「待て。それなのに何で本屋に居るんだ」

紙でも喰うのか？
「食べませんです！　しいかは羊さんではありません！」
「いや、そもそも羊は紙を食べないだろ……」
「？　キリンさんでしたか？」
「その事実が本当だったらキリンが首伸ばした意味ないな」
無駄過ぎる進化だ。
「しいかも首を伸ばしてみたいです！」
「こえーよ」
リアルろくろっ首の詩歌ちゃん何て見たくない。
「それで……どうして本屋に行き着いたんだ」
「最初はスーパーを目指していたのですが……中々見つからなくて、仕方がないのでどなたかに聞こうと思ったのですが、近くには誰もいなかったのでこの本屋さんに入ってどなたかに聞こうと思ったのですが、ちょうどお姉ちゃんの欲しがっていたご本があったので手を伸ばしていた所なのです」
「目的を完全に通り過ぎてるじゃねぇか」
相変わらず方向音痴だ。ここからスーパー『コズミニック２４』（店名変えろや）は徒歩５分程度だ。
……ていうか良い妹過ぎるだろ。姉の為に本をプレゼントする何て……全く本当良い子だな。
「それで、どの本何だ？」
詩歌ちゃんの背では確かに届かないだろう。
「えっとですね。『意中の女の子を落とす方法２』です」
「……」
取ってやるよ。と言う台詞を飲み込んでしまった。
「以前お姉ちゃんがうへへとか、すっごく嬉しそうに『意中の女の子を落とす方法』笑いながら読んでましたから、その続編なら喜んでくれると思いましたのです」
「……」
純粋無垢な妹の前でそんな本読んでんじゃねぇー！！

自宅でも精が出る事だなおいっ！
「あ、あのな詩歌ちゃん……」
「はいです」
「その本は止めて置いた方が……」
「どうしてなのです？」
可愛いらしく小首を傾げる詩歌ちゃん。
「いや、えっと……」
何て説明すりゃいいんだよ！　姉の性癖を小学生の妹に教えろとでも言うのか！
貴方のお姉ちゃんは百合で俺の幼なじみに恋してるんだよ☆……
……何て言えるかぁー！！
「他のプレゼントとかどうだ？　そのぬいぐるみとか」
「んと……それはお姉ちゃんは持ってますです」
「アイツが？　何の？」
「みなづき様～とか言って、ほお擦りしたり、抱きしめたりしてました」
「……」
女を殴りたいと思ったのは初めてだ。瑞歌……今度あったら張っ倒す！
「お姉ちゃんにはいつも迷惑をかけてるです」
「かけられてるんじゃねぇのか？」
「そんな事無いのです。パパとママが居ない時ずっと面倒を見てくれてました。……ちょっと変な所もありますけど、しいかはお姉ちゃんの事大好きなのです！」
「……」
アイツが……ね。確かに瑞歌の奴何だかんだ言って面倒見いいもんな。

『ちょっとアンタ！』
全校集会の時。面倒でサボろうとして教室に残っていた時（当時みなと恭二は違うクラスだった）、がらりと音を起てて誰かが入って来た。
憤怒の表情を浮かべ、肩で息をしている眼鏡をかけた女子――小野瑞歌だった。
『あ？　何だよ委員長？』
『何サボろうとしてんのよ？』
『うっせ―な。俺の勝手だろ？』
『何言ってんのよ！？　関係有るわよ！　私はアンタの言った通り委員長なのよ！　一人サボる奴を放って置ける訳無いでしょ！？』
『知るかよ。俺の事何て放っときゃ――』
『駄目って言ってるでしょ！　一人で居る奴を私は放っとけないの！　ほら！　さっさと来る』
『お、おい！　引っ張んなよ』
当時俺は皆に恐れられていた。この時の俺は少し荒れていて、何に対しても無愛想だった。だから話しかける奴なんて、ましては手を引いてくれる奴何て彼女が始めてだったのだ。
『アンタに何があったなんか知ったこっちゃ無いわ』
『……』
『でもそんな面されたら、こっちも気が滅入るのよ！　分かった？　分かったならもっと笑いなさいよ』
勝手な奴だと思った。みなや恭二以外でこんな奴が居るとは思わなかった。
時間的に既に集会は始まっている筈だ。なのにこいつは恐らく俺が居ない事に気付くと飛んで来た。こんなどうしようも無い俺の為に……
本当自分勝手で、お節介で……優しい。そんな奴が居るとは……

「……はぁ」
「？　どうしたのですか？」
「取ってやるよ。何処に有るんだ？」
「えっと、右の方に……でも悪いです」
「気にすんなよ……これか……」
女同士が抱き合っている表紙だった。……同性愛編と書かれているのは見なかった事にした。
「どんなご本なのですか？　しいかは見せて貰った事が無いので気になります」
「詩歌ちゃんは一生見ちゃ駄目だ！」
「ほぇ？　何でなのですか？」
「お姉ちゃんの絶対的な秘密だからだ！」
「秘密なら、仕方ないなのです……でも気になるのです」
「気にするな。絶対に」
後ろの値札を見て、２０００円と書かれていた。
「意外に高いな……代わりに買ってくるけど……いくら持って来たんだ？」
「５００円です」
「……もう一回」
「しいかの全財産の５００円です……もしかして……足りないですか？」
足りねーよ！！　バーカ！　何て……言えるかよ！　目をうるうるさせる詩歌ちゃんに現実突き付けられる訳無いじゃねーか！！
……考えて見れば小学生の金銭感覚何て当てになる筈無いか……
「足りるよ……うんピッタリだ」
自腹を切る事にした。小学生に……負けた。色んな意味で……
「本当なのですか！　良かったですっ」

きらきら目を輝かせながら可愛いらし過ぎる笑顔を浮かべる詩歌ちゃん。この笑顔を裏切れる筈が無い。
「買ってくるよ……」
「はいですっ。よろしくなのです！」
５００円を受け取りレジへ向かう。しかし……こんなタイトルの本を男の俺が買う……誰に見られたら確実に死……
「あっ。こうちゃん！　なぁにその本？」
そんな声を聞いた直後慌てて、後ろに隠す。忘れてた。そういやみなと来てたんだっけ。
「こ、これは何でも無い！」
明らかに何でもあると言う様子を醸し出してしまった！
「もしかしてえっちな本？」
「ち、違う！」
覗き込まれそうのを必死に隠す。
「……こ、こうちゃん、意中の女の子を落とす方法って……」
タイトルを！　見られてたぁー！！
「待て……違う！　違うんだ！　みな！」
「こうちゃん……好きな子って誰なの！？　まさか瑞歌ちゃん！？」
「んな訳あるかぁー！！」
「知ってる人なの！？　ねぇ！？　答えてよ！」
もの凄い気迫で迫ってくるみな。恐いって！
「だから、誤解だって……」
「こうちゃんおにいちゃんまだなのですか？」
詩歌ちゃん……このタイミングは無いわー。
「ま、さか……そんな小さな……女の子……」
「ち、違う違うから！！　お前は今壮絶に勘違いしている！」
「う……うわぁぁーん！　こうちゃんが小学生の女の子とぉー！！」
ついにみなが泣き出してしまった。
「違うって！　この女の子は知り合いで、別に好きって訳じゃ――」
「？　しいかはこうちゃんおにいちゃんの事好きですよ。こうちゃ

んおにいちゃんはしいかの事嫌いですか？」
「そんな訳無いだろ！　嫌いな訳……」
「やっぱりこうちゃんは小さい女の子の方が好きなんだぁ～！！」
「だから違うと……そして大声で俺がロリコンみたいな誤解を招く発言を止めろー！」
「？　ロリコンとは何ですか？　ダイコンの親戚なのですか？」
「空気を読まない質問は止めてくれ！」
「うわぁぁーん！　こうちゃんがこうちゃんがぁー！」
「誤解だから泣くな！　ああもう全部お前のせいだからなぁ！　瑞歌ぁー！！」
みなの誤解が解ける頃には日は既に落ちていた。

Essence9「確かそろそろ……」

Essence9「確かそろそろ……」

夜。ようやくみなの誤解を解いた俺はスーパーの袋を引っ提げて帰路に着いていた。

「なぁんだ……瑞歌ちゃんへのプレゼントだったんだねっ」

「絶対瑞歌には言うなよ」

そうなったら俺は本気で死ねる。マジで。

「うんうん。分かったよ～。照れ屋さんだねっ。こうちゃん！」

「ちげーよ！　馬鹿」

単に詩歌ちゃんの悲しむ顔を見たく無かっただけだ。決して瑞歌の為じゃない。断じて。

『ありがとうですっ。こうちゃんおにいちゃん！」

詩歌ちゃんの笑顔を思い出す。

あーゆう天真爛漫な子はいつも笑顔で居て欲しい。

「……詩歌ちゃん無事に帰えれるかな？」

詩歌ちゃんの方向音痴は半端無いからなぁ。

近くまで送ってあげても良かったな。瑞歌の家はそこまで遠く無い。

「何だかこうちゃん、詩歌ちゃんのお兄ちゃんみたいだね」

「ぬ……放って置けないだろ」

「そういう事をハッキリ言えるこうちゃんは凄いと思うな」

「……そうかぁ？」

「うんっ。そだよ！」

堂々と胸を張って、誇らしげにそう言ったみな。

参ったな……別に俺はそんな出来た人間じゃない。みなも恭二も

それが分かっていない。
「しかし……今時姉ちゃんにプレゼントする妹なんて居ないだろ？
ホントにあんな変態に勿体ない」
「本当に良い子だね。ところで瑞歌ちゃんはあの本を何に使うのかな？　男の子向けだよね？」
「……」
多分お前を落とす為の本だ。
明日から大変だな。
知らぬが仏だ。
「……プレゼントか」
ん？　プレゼントといやぁ……そう言えばそろそろ……
「なぁ。みな。今日は何日だっけ？」
「ん？　１１月３０日だよ？　それがどうしたの？」
「いや……たいしたことじゃないんだ」
……忘れてた。みなの誕生日明日じゃないか。１２月１日……しかも明日は土曜日で休みだ。
「どうしたの？　こうちゃん。私の顔になにか付いてる？」
「いや……」
コイツ……覚えて無いのか？　ったく。自分の事ぐらい覚えておけよ。
「……とりあえず帰ろうぜ？　冷えてきたしな」
「うんっ」

家に帰って来た時にはもう既に7時をまわっていた。
みなは私服に着替え、エプロン姿でリビングに立っていた。
「今から作るから待っててね」
そう言ってみなは夕食の準備を始めた。
「慌てなくても大丈夫だぞ」

俺は返事をしながら、自室に戻った。
「……プレゼント……どうすっかな」
机の椅子に腰掛けながら、考える。
ぬいぐるみとか……既に大量に持ってるんだよなアイツ。髪飾りとか……どれが似合うかなんて分からない。花とか……種類も何も分からん。アクセサリーとか……そんな金は無い。本とか……大量買い込んでたからなぁ。どんな本を渡せばいいのか。
……大体……女って何を渡せば喜んでくれるんだ？
「例年通り恭二に聞いてみるか……」
携帯電話をポケットから取り出し、恭二の家にかける。恭二は携帯を持って居ないのだ。
「……出ないな」
暫くコールを続けるがなかなか繋がらない。
「お……」
やっと繋がった。そう思った直後――
「うぃーす！　こちらふかめでぇっす！！」
「――っ！？」
そんな酔っ払いの大声が俺の耳を射ぬいた。
み、耳が……
限度……考えろよ。
「もしもぉし！　誰だよごらぁ！　切るぞ！　おおい！」
ドスの聞いた声で叫ぶ酔っ払い。誰か分からん電話取ってそりゃ無いだろ。相手が俺じゃ無かったらどうする気だよ。
「この……酔っ払いが！　どんだけ飲んでんだよ！」
俺も怒鳴り声で電話の相手――深恭子（ふかめきょうこ）にそう切り返す。
「んん！？　その声……こーちんじゃねぇか！！　ひっさしぶりじゃん」
「人を名古屋コーチンみたいに言うじゃねぇ！　大体酒は控えろっつっただろ！　この駄目姉！」
「かてぇ事言うなよこーちん。アタシとアンタの仲だろぉ？」

「アンタなぁ……警官の台詞じゃねぇぞソレ」
ここで深恭子につうて話をしてみよう。その名をこの街で知らない者は居ない。その名を聞けば不良は震え泣く子も更に泣く。喧嘩無敗。不良最強。不良校を素手で叩き潰した。拳で校舎を粉々にした。凶悪なヤクザを壊滅させた等様々な伝説を残した彼女は、何を思ったのか警官になりやがった。理由は、
「なんかカッケーじゃん？」
全国のお巡りさんに謝れ。
まぁ彼女が警官になった事で犯罪を犯すと殺され等の噂が広がり結果として治安はよくなった訳だけどな。
以上。説明終わり。ていうかこれ以上恭子姉ぇについて話したく無い。何故ならその伝説がマジな話しだと知っているから！

「んで……恭二は？　俺恭二に用があんだけど」
「つっれねぇなぁ！　こーちん。アタシともっと話そうぜ！　だべろうぜぇ！」
「……」
酔っ払いは絡んでくるからタチが悪い。恭子姉ぇは素でもタチ悪いけどな。
「だから……俺は恭二に……」
そこでふと思い付く。一応恭子姉ぇは信じられないかも知れないが女だ。もしかすると参考になるかも知れない。
「なぁ、恭子姉ぇ」
「んあ？」
「アンタが貰って嬉しいモノってあるか？」
「んだソレ！？　心理テストかぁ？」
「何でそんな解釈になるんだよ。なるべく真剣に考えてくれよ」
「そうだなぁ～」
電話ごしに考えるような雰囲気、そして、

「デザートイグールだな！」
「で、でざ…？」
何だ……ソレ？　デザート？　お菓子か何かか？
「知らねぇのか？　銃だよ銃。トーシロが撃つと反動で肩が外れるつーあれ。知らねーかな？　映画とかよく出てくんだけどよ。二丁構えて撃ってたりすんだよ。んでド派手に爆発すんだよなぁ～。あれをムカつくハゲ署長のドタマにぶち込んでみてぇんだよなぁ～。つー訳でアタシはソレ貰えりゃ街中でストリップしてもいいぐれー喜ぶぜ」
「……」
この女……いやそもそも人外に聞くんじゃ無かったと俺は激しく後悔した。
「しっかし何だよ。いきなりよぉ……んん！？　ああみなっちのプレゼントかぁ？」
「馬鹿！　声がデカイ！　みなに聞こえちまうだろ！」
「わっかいねぇ……みなっちならこーちんがプレゼントしてくれるんなら何でもいいじゃね？」
「投げやりだな……」
「事実じゃん」
「……それが問題なんだよな」
「お前が大切と思ってるモノ」
「……あ？」
「そりゃあ何だ？」
「俺の大切な……モノ」
「それをプレゼントにしたらどうだ？」
「……」
俺の大切なモノ……か。
酔ってる癖に、的確な事を言うな。だから……憎めないんだよな。
「サンキュー恭子姉ぇ。参考になった」
「おぅ！　いいって事よ！　アタシの誕生日にデザートイグールを

プレゼントして貰えりゃ……」
「無理に決まってんだろ！　つか警官がんなモン欲しがるな！」
「へいへい……恭二は居るけど……代わるか？」
「いや。いいや。十分だ」
「そっか。んじゃ。みなっちと宜しくやれよ！」
「だから警官が！　んな事言うな！」
そう言うと同時に電話を切る。
「……大切な……モノか」
……そういやアレ、みなに似合いそうだな。……でもアレは……
『コレ？　母さんの一番のお気に入りなの』

……懐かしい事思い出しちまったな……
「っ！？」
頭に激痛……事故以来の後遺症のようなモノだ。いや……それより
タチが悪いかも知れない。
「クソっ……まだ……大丈夫な筈なんだが…」
布団に倒れ込む。みなには見られたく無い……な。
そう思った直後俺の意識は闇に落ちた。

『どうして……私に』

『友達になりたかったから……じゃ駄目かな？』
『ううん……そんな事無いよ。すっごく嬉しい』
『じゃあずっと友達だねっ』
『うん！　ずっと』

Essence10「本当にアイツは……」

Essence10「本当にアイツは……」

『う……ぐすっ……うぅ……』
誰かが泣いてる？　女の子の声……誰かが泣いてる。
『ひぅ……ううあぁ……』
み……な？　どうして泣いて……？
『こうちゃん！　こうちゃん……』
俺はここに居る……居る筈なのに。手が届かない。手を伸ばして慰めたいのに……手が届かない。
『う……ぐすっ……』
こんなにみなが泣いてるのに……俺はなんの役にも立てない。俺は……
『大丈夫だよ』
少年の声が響く。……誰だ？　ぼやけてよく見えない。
『みな……ボクがついてるから』
『う、うん！』
二人は手を繋ぎ歩き出した。やがて見えなくなる。俺は……ただ闇の中に一人残されて……

「う……」
「！？」
目を覚まし真っ先に飛び込んだのはみなの顔。驚いたような表情。目は真っ赤になって泣き晴らした後があった。
「こ、こうちゃん！」

「……お、おはよう？　みな」
いや……違うだろ……俺。何普通に挨拶してるんだよ。
「う……」
みなの目が潤み始める。やべ……この予兆は……
「う……うわぁぁぁーん！！」
大声で号泣し始めたみな。こうなったら中々止まらない。
精神的に幼過ぎる！
「お、おい！　泣くなって……」
「うわぁぁーん！　良かった、良かったよぉ！　こうちゃん～！！」
「何で……そんなに泣いて……あ」
そこで俺はようやくみなが泣いている原因が分かった。
そういや……俺倒れて……成る程心配させる訳だ……
「死んじゃったのかと思って……」
「馬鹿。縁起でも無い事言うな。……悪かったな心配させて」
起き上がろうとして気付く。後頭部の柔らかい感触にみなの顔アップ。これはまさか、属に言うひざ枕……とか言う奴じゃ無いですか……と言うかこのアングルで見る胸は……反則だ。顔が赤くなるのを感じる。
「も、もう大丈夫だぞ。みな……」
「まだ、立っちゃ駄目だよ！」
「いや……でも…」
「駄目！　お顔も真っ赤だし……」
それはお前のせいだ。
……暫く……こうしてるしか無いか。恥ずかしいがつい落ち着いてしまう。
「もう……大丈夫なの？　こうちゃん？　何処も痛くない？」
心配そうな口調でみなは問い掛けてくる。
「ああ……大丈夫だ。ただの立ちくらみだ。そんなに心配するなよ」
「ホントに？　救急車要らない？」
「大袈裟だな……要らないよ。ちょっと疲れてただけだ」

「ホントにホント？　病院とか行かなくて大丈夫？」
しつこく聞いてくるみな。まぁ当然と言えばそうだが。
正直に話す訳にはいかない。少なくとも今はそんな時期じゃ、ない。
「ああ……大丈夫だ」
「こうちゃんがそう言うなら……」
深く追究して来ないみな。俺にとっては有り難い。
だがいつまでも隠し通せる訳は無い。いずれ……俺は。
「……心配かけて悪い」
「うん……いいよ。こうちゃんが大丈夫なら」
そう言ってみなは微笑んだ。俺の見たくない無理をした笑みだった。

「おっ。美味そうだな」
今日の夕食のメニューは鶏肉と野菜のソース炒めとポテトサラダとご飯。
「食欲はあるの？」
「ああ！　当然だぜ！」
食欲が無くなる類のモンじゃないしな。食欲が無くてもみなの料理は食べたい。
「ふふっ……良かったぁ」
「じゃあ食おうぜ」
「うんじゃあ」
「「いただきます」」

夕食後（いつも通りみなの料理は美味かった）。俺は部屋に戻る。

「しまったな……。暫く無かったから油断しちまった」
みなの前で倒れてしまうなんて……本当に気が緩んでたな。
あの日以来時たま俺を襲う頭痛。頭の割れるような痛み。それが起きた後は意識を失う。事故で頭を強く打った後遺症。医者の話ではそういう事らしい。　そして肉体面と言うより精神面での後遺症。
眠り病（ナルコレプシー）とも言うらしい。
……俺はまだ事件の事を吹っ切れてはいないようだ。
一度目を閉じれば……脳裏に焼き付いた映像。
壊れたビデオテープのように自動再生される悪夢。
瓦礫と、人の焼ける嫌な臭い。……そして、
『こう……』
思い出す母さんの笑顔。死ぬ瞬間まで……母さんは……

母……さん……

「こうちゃん？」
「！？」
みなの声で現実に引き戻される。
「どうしたの？」
「……何でも無い。つーか何の用だよ」
内心の動揺を悟られまいと必死に平静を装い、入って来たみなを見る。

バスタオル一枚だった。
裸よりエロく無い？
ふっ。甘いな。黄色いバスタオルから溢れ出る胸。
風呂上がりと言うのがポイントだ。濡れた躯に風呂上がり特有の香りと相乗効果で色っぽく感じる。ちらりと隠れた肌色にもエロスはあるのさ。
……

……何言ってんだ俺？

いや……言ったよ？　言いましたよ？　確かにバスタオルぐらい巻いとけって言ったけれでも！

だがその程度で平静を失う俺じゃない！！

「何の％＝だ■？」

「文字化けしてるよ？」

「って無理に決まってんだろぉ！？　馬鹿かお前はぁ！！」

「ひゃ！？」

「羞恥心とか無いのかよ！　せめて……せめて下着着て来いよ！」

「え？　でもこの前はバスタオル一枚でいいって……」

「あれは裸よりマシって言っただけだぁ！　許可したつもりはねえぇぇー！！」

「我が儘だねっ。こうちゃん」

「お前が自由過ぎんだよ！　大体何しに来たんだよ！」

「あ。そうだ。こうちゃんがあんまり叫ぶから忘れてたよ！　すっごく重要なコト――だよっ」

「……何だよ？」

「牛乳貰っていい？」

「俺の許可要らないからなぁ！？　早く出ていけえぇぇぇー！？」

バタン！！

「はぁはぁ……全く……」

俺のシリアスシーンが台なしだ……

「……本当にアイツは」

ウジウジ悩んでるのが馬鹿みたいだ。

いつの間にか自分でも気付かない内に俺は微笑んでいた。

アイツが居れば……俺は……

「……」

今考えるのは止めだ。少なくとも……今、は。

Essence10「本当にアイツは……」（後書き）

区切りのいい十話です。
よ、ようやくここまで来れたです。
なので次は番外編の予定です。詩歌ちゃんと主人公の出会いの話です。
恭二のお姉さんも登場します。
乞うご期待！

Essence SS（しょーとすとーりぃ）1「こうちゃんおにいちゃん」

Essence SS1（しょーとすとーりぃ）「こうちゃんおにいちゃん」

7月26日。夏休み。休日程つまらなく、くだらないモノは無い。
そう思うのは俺が独りだからか。
風賀町の商店街を当ても無くぶらついていた。
五月蝿いアイツ……みな、姫野みなづきと言う俺の幼なじみは居ない。
母親と共に旅行。みなにしつこく誘われたが断った。久しぶりの親子水入らずに俺が邪魔する訳にはいかない。
男友達の恭二は部活漬けの毎日だ。
小野は……そもそも友達じゃねぇな。
「……」
俺は……寂しいとか思ってるのか？　……違う。
「くだらねぇ……」
元々……俺は独りだ。そう。独りが好きなんだよ。俺は……
「……暑い」
そういや暑い。言われて見れば暑い。今日ニュースで猛暑って言ってた気がする。
……いや。それにしても暑い……
「アイツ等が居ないのも夏が暑いからだ」
ヤバイ……思考が可笑しくなってる。
「公園で一休みするか……」
このままだと暑さで干からびてしまう。日陰のベンチに座るか……
「ふぅ……」
ベンチに座り一息つく。その様子は端からみりゃ外回りに疲れたサラリーマンにも見えるだろう。

しかも周りに人が居ない。遊具も少ない為子供に人気が無いのだろう。
「……」
そういやココ……みなと初めて会った場所だな。
『一緒に帰ろっ？』
「……」
あの時……みなが声をかけてくれなかったら……俺は……
何気無く公園の入口に目を向ける。
「ん……？」
俺の視界に飛び込んで来たのは、黄色いバックを持った小さな女の子。小学生低学年ぐらいの長いポニーテールをした女の子だ。
キョロキョロと辺りを見渡し、再びどこかへ消えた。
かと思うと再び現れる。
再びキョロキョロ。そしてパタパタと駆け出し消える。
かと思うと再び現れる。
「何……やってんだ？　アレ？」
永遠とそれを繰り返してる女の子。
「ぅ～。何度歩いても同じ場所に着いてしまうのです……」
まさか……迷子か？
「これで12回目なのです……しいかは無限回廊に迷い込んでしまったのです」
「って迷い過ぎだろ！」
「ぅぅ！？」
ヤベー。思わず突っ込んじまった。
小動物のように驚きこっちを見る女の子。かわいらしい顔立ちをしていて……ん、待て。どこかで見たような……？
「ぅ～～～～！　どなたですかぁ！？」
盛大に驚かれてしまった。
「ぅぅぅぅぅぅぅ～～」
今度は威嚇され始めた！？

ポニーテールが逆立ってる……どんな構造になってんだ？
「どうどう……ちょっと落ち着け。別になんもしねぇよ」
「うぅぅ～～知らないおにいちゃんには着いて行くなってしいかはおねえちゃんに習ったのです」
成る程名前が分かった。ついでに姉が居る事も分かった。しいか……ね。どっかで聞いた事あるような……あ。
そういや前小野の奴が妹と居るって言ってたな。その娘か？　ど　ことなく面影もあるしな。
「なぁ。しいかちゃん？」
「名前を知られてました！？　ストーカーさんですか！？」
なんたって小学生をストーキングしなきゃなんねーんだよ。
「違う。君自ら言ったんだろうが。君のお姉ちゃんって瑞歌って名前じゃないか？」
「家族こーせいを知られてました！？　個人情報ろーえいです！？」
半分以上自分がばらしてんだがな。
「違う。俺は君のお姉ちゃんのクラスメイトだよ」
「くらすめいと？」
「ああ」
「あに○いとの親戚ですか？」
「何でア○メイト知っててクラスメイトを知らないんだよ！？」
どんな小学生だ！　流石小野の妹だ！
「くらすめいどとはまにあっくです！」
「意味分かってんのか！？」
確かにマニアックだな！　クラスメイド！　見て見てぇよ！
「じゃなくて……同級生だよ」
その言葉でようやく理解してくれたのは逆立っていたポニーテールが元に戻った。……本当どうなってんだよ。
「みずかおねえちゃんのお知り合いだったのですか。これはご無礼でした」
ぺこりと頭を下げるしいかちゃん。

「ああ。それで、どうしたんだ？」
「それが……今晩のおかずを買おうとスーパーに行こうと家を出たのですが……いつの間にかこの公園に戻ってしまうのですよ」
「……」
迷い過ぎだろ。ここからスーパー。コズミニック２４（店名変えろや）まであんまり距離は無いんだかな。
「行き方くらい教えてやるよ」
「ホントですか？」
「ああ」

～俺説明中～

「分かったか？」
「良く分かりませんけど分かりました！」
本当に……分かってんのか？
「行ってくるのです！」
パタパタと元気に走り去って言った。
「大丈夫なのか……？」

数十秒後。

「また……戻って来たのです……」
「嫌な予感はしてたけどな……」
仕方ないな……
「一緒に行くか？」
「え？　いいのですか？」
「俺も行く予定だったしな」
食材を買い込まなくちゃだしな。

「……ぅぅ～」
しいかちゃんは少し考えるように唸る。
「はいっ！　分かりましたです！　おねえちゃんのお知り合いに悪い人は居ないのです！」
「随分信用してんだな……」
「はい！　とっても優しいのです！」
「アイツが……ね」
ま、確かに面倒見はいいみてーだしな。家では良い姉なのだろう。
「それじゃ行くかな……えっとしいかちゃんでいいんだよな？」
「はい！　小野詩歌です！　詩を歌うと書いて詩歌なのです！」
「そっか。詩歌ちゃんか。よろしくな」
「はいです！　……えっと……」
「？　何だ？」
「あの……なんとお呼びすればいいのでしょうか？」
「ああ……」
そういや名乗って無かったな。
「俺は……」
名乗ろうとした直後、ポケットに入れていた電話が鳴り始めた。
相手は……姫野みなづき。
「あ……悪い」
「いいのですよ！」
「ああ」
お言葉に甘えて電話に出る。
『こうちゃーん！！』
「！！」
大音響のそんな声が鼓膜を貫いた。
み、耳が！　耳がぁ！　あぁぁ！
「声考えろ！　みな！　鼓膜破る気か！？」
『だって……だってこうちゃん電話に出なかったから……心配で……心配でぇ』

「あーあーあー。分かった。分かったから泣くなって心配かけて悪かった」
『ぐす……何にも無いよね？』
「超元気だから問題ねぇよ。それで何の用だよ？」
『ああ。うん。あのねすっごく大事な用っ』
「だから……何だよ？」
『こうちゃんの声が聞きたかった――だよっ』
「……」
『？　どうしたの？』
「は、恥ずかしい事堂々と言ってんじゃねぇ！」
俺は顔を真っ赤にしながら電話を切る。
ヤベー……本気でドキッとしてしまった。ああいうストレートな言い方はその……来る。
「じー……」
「何だよ……その目」
「彼女さんですか？」
「ぶっ！　ち、ちげー！？」
「照れてカワイイおにいちゃんですねっ」
「ちげーって！　そんなんじゃねーよ！　アイツとはその、幼なじみで……」
何で俺は小学生に言い訳してんだ……？
「許婚と言う奴ですねっ」
「違う！　ガキがませた事言うんじゃねーよ！」
「つんでれですね」
「意味分かってんの！？　アンタ！？」
小学生のボキャブラリーに何でツンデレと言うマイナー過ぎる語句があるんだよ！？
「喪えですよね」
「字が違う！？　何で喪に服してんだよ！？」
コイツ絶対意味分かってねーな。

「知ってます！　こうちゃんおにいちゃんみたいな人の事をそう言うのですよね？」
「断じて違う！！　俺はツンデレじゃねー！　って何？」
「こうちゃんと言うお名前のようですからこうちゃんおにいちゃん」
「電話聞いてたのかよ……長くないか？」
大体俺の名前はこうちゃんじゃねーんだが。
「こうちゃんおにいちゃんはこうちゃんおにいちゃんです！」
「読者が読みづらいだろ？」
「何を言ってるのですか？」
「さぁ……何言ってるんだろうな」
「変なおにいちゃんです！」
「……。まぁいいか」
俺は厄介事に巻き込まれたなと溜息をついたのだった。

Essence SS（しょーとすとーりぃ）2「結局アンタは……」

Essence SS2（しょーとすとーりぃ）「結局アンタは……」

「人参にジャガ芋に牛肉……牛乳か……シチューでも作るのか？」
「はいです！　おねえちゃん特製のシチューなのです！」
「……ふぅん。アイツ料理出来んだ」
鍋を爆発させたり、食べたら失神する程マズイとかそんなイメージだったんだがな。
流石に漫画だけか……
……聞かれたら殺されるな。
「はいです！　こうちゃんおにいちゃんは料理出来ないですか？」
俺が惣菜モノばっかり買ってるからかそんな質問。
「出来ねー事も無いんだがな。面倒だし、一人暮らしだと自炊すると逆に金かかる時あんだよな」
「……一人暮らし、ですか」
不思議そうに首を傾げる。ああ確かに俺の歳を考えりゃ不自然だよな。
わざわざ暗い話をする必要はねーよな。こんな元気な娘の前で……
「寂しい……ですか？」
ところが詩歌ちゃんはそんな意外な事を言った。
「パパとママが居ないの……寂しいです。しいかもパパとママがあまり家に帰りませんから……少し気持ちわかるです」
悲しそうにそう語る詩歌ちゃん。
「……寂しい、か」
「でもおねえちゃんが居るです。寂しい時おねえちゃんが居ましたから……こうちゃんおにいちゃんにも居るですよね」
「アイツは……」

母さんを失い、親父も俺の前から消えた。俺以外誰も……居なくなって。
そんな中……姫野みなづきが、居た。居てくれた。
アイツが居なけりゃ……俺は。
「ああ。そうだな。そうかも知れない」
「はいです！」
元気良く返事をする詩歌ちゃん。全く……みなの前じゃ絶対言わない事だ。子供の前だと正直になれるモンだな。

「……ふと、思ったんが……」
買い物を終えた俺達は外に出ていた。
「何がですか？」
「帰り道分かんのか？」
一番疑問に思っていた事を口にしてみる。すると案の定、
「うぅぅ～！」
困ったように涙目になる詩歌ちゃん。
「だろーと思った」
「うぅぅ……」
……仕方ねーな。
「分かった分かった。送ってやるから泣くなよ」
「うぅ？　い、いいのですか？」
「ああ。乗り掛かった船な訳だしな」
「こうちゃんおにいちゃん……凄く良い人です！」
「……俺は別に」
「人は見かけによりませんです」
「……悪かったな」
「はいです！」
「……んで住所は？　どの地区何だ？」
「……うぅ」

「……交番、行くか」
正直……あまりいやかなり気が進まない。この近くの交番にはあの人が居るからだ。
深恭子。豪快、残虐、暴君を絵に書いたような人物で、中学、高校の時この風賀町を恐怖に陥れたという過去を持つお巡りさんである。しかも既婚者（家事は夫に任せっきりらしい）……ちなみに俺の喧嘩の師匠だったりする。
なるべくなら顔を合わせたく無い訳だが……
「背に腹は代えられねーか……行くぞ。詩歌ちゃん」
「はいです！」
「……この時間はパトロールだった筈だしな」

「んん！？　おお、こーちゃんじゃんか！　ひっさしぶりぃ！」
「何で居るんだよ……アンタ」
俺の目の前には警官の格好をした小学生……もとい深恭子が居た。ツインテールに吊り上がった瞳は生意気盛りの小学生に見えるが、見かけに騙された者は無限に居る。こう見えて中身は悪魔だ。小悪魔じゃない悪魔だ。
「何かスゲー勢いでこーちゃんに殺意沸いて来てんだが？」
「き、気のせいだろ」
勘……鋭いな。思うだけでもアウトか。
ま……口に出した瞬間、顔の形が変わるまで殴られてただろうけど……
「もう一回聞くが……何で居るんだよ。この時間パトロールの筈だろ」
「よく調べてんじゃん。そんなにアタシが好き？」
「ああ。大好きだ。だから何で居るんだよ」
「照れるなぁ～。いやなに後輩に『おねだり』して代わって貰った」
成る程……脅迫（おねだり）か……いっそクビになれ。

「ところで」
恭子姉ぇの視線が詩歌ちゃんに向く。
「……ぅぅ～」
虎をも目を逸らす恭子姉ぇの視線だ。詩歌ちゃんは涙目になりながら俺の後ろに隠れる。
「ガン飛ばしてんじゃねーよ。怯えてんだろ。大丈夫だ詩歌ちゃん。こっちが何もしなけりゃ襲ってこねーよ」
「アタシを猛獣扱いするたーいい度胸してんじゃん」
そう言いつつ豪快に笑う恭子姉ぇ。幼い容姿とのギャップが大きい。その差はかなり恐い。こんな人とどうしてあの人は結ばれたのだろう。
「まぁ何だ……人の趣味にケチ付ける気はねーだが……」
「あ？」
趣味……？　一体何の事だ？
「小学生低学年はマズイんでねーの？　みなたんが居ながらよ」
一瞬……何を言われたか分からないように唖然とする俺……って
「んな訳ねーだろ！？　大体みなもそんなんじゃねーって言ってんだろ！」
「このアタシじゃ物足りねーのか？　アタシも大概ロリボディだと思うんだが……」
「ちげー！！　つーか自分の事ロリとか言ってんじゃねぇ！　一応既婚者だろ！？　アンタ！
ていうか自分がロリって一応自覚してんのかよ！？
「ろりって何ですか？」
「詩歌ちゃん何故このタイミングで入ってくる！？」
「アタシとキミの属性の事だぜぇ？」
「恭子姉ぇも教えんなぁ！！」
「ほぉ……じゃあアタシと2P……」
「アンタ本気で警官か！？」
「にぴー？」

「教えないからな！　可愛いらしく小首傾げても教えないからな！
恭子姉ぇも教えるな！！」
「仕方ないです……おねえちゃんに聞くです」
「やめてくれ！！」
間違いなく俺のせいにされる！　明日からの俺のあだ名がロリコンになってしまう！
「中学生がこまけー事気にすんなよ」
「細かくねー！！」
本筋を忘れる勢いの会話は暫く続いた。

「ふーん……迷子ねぇ」
「ああ……住所とかも分からないんだと」
ようやく通常業務に戻ってくるた恭子姉ぇ。基本的に仕事はかなり優秀らしいしな（つーかそれで優秀じゃなかったらすぐクビだ）
「電話番号とかわかんねーのか？　しいちゃん」
「し、しいかの事ですか！？」
「他に誰が居んだよ」
「は、はい。分からないです」
「……俺も知らないな」
こんな事ならメアドと電話番号聞いとくべきだったな。
「仕方ねーな。小野詩歌か……ちょっと待ってな」
本棚から資料を漁り始める恭子姉ぇ。その後ろ姿はお遊戯会でお巡りさん役をやっている小学生にしか見えない。ランドセルがまだ似合う2×歳ってどうなんだ？
資料を取り出し、眺める恭子姉ぇ。
「お……あった……小野詩歌小野詩歌……」
「分かったか？」
「ん～。ちょっと……お、あったぞ」
「本当か？」

「ああ。連絡入れるから……」
「待って下さいです！」
急に大きな声を上げる詩歌ちゃん。一体何だ？
「今……パパとママ居ないです……」
「ふぅん。じゃ働いてる場所分かるだろ？　そっちにかけるわ」
「んと……分からないです……」
「ああ！？　テメーの親の仕事もしらねーのかよ」
「ぅぅ！！　ごめんなさいです！」
「っとワリィ……昔の癖で……」
凄む癖は治って居ないようだ。まぁ警官になって結婚をしてからかなり丸くなったんだけどな。
「仕方ねー。住所分かるから送っててやれ」
「……ああ。最初っからそのつもりだったしな」
「……」
睨み付けるように俺を見る恭子姉ぇ。俺でもたじろいでしまう程の気迫がある。
「けっ。相も変わらずお人よしだな。結局アンタは」
「違う。俺はそんなんじゃ……」
「それをちょっとはみなたんに向けてやれよ」
「……」
アンタも……相変わらず痛いトコ突いてくるな。
「アンタには関係無いだろ」
「アタシの舎弟だろーが」
「いつの話だよ。ソレ」
「逸らすな。逃げんな。向き合え」
そう言って再び俺を睨み付ける。俺も負けじと睨み返す。
「……女泣かす野郎は最低だぜ？」
「ああ。俺は最低なんだよ。知ってるだろ」
「そう自分を卑下して楽しいか」
「……」

「よくしらねーガキの迷子の世話何てフツーしねーよ。そう言うトコ素直に誇りゃいいのに。不器用過ぎんだよ」
みなも恭子姉ぇも恭二も皆何故俺なんか過大評価するんだ。俺は……
「たくっ。中坊の癖に考え方老けてんだよ。気楽にいけよ」
そう言って恭子姉ぇは優しく微笑んだ。
だから嫌いになれないんだよなこの人。
「考えてみる……」
「ああ。精々悩めよ若人」
「オッサンかよ」
「オトナの会話です！」
「だから何で微妙なタイミングで入ってくるんだ詩歌ちゃん」
「アタシみたいなレディーになるんだぜ？」
「はいです！　キョーコおねえちゃんみたいなレディーになりたいです！」
「やめろ！　年端もいかない女の子を修羅の道にひきづり込むな！」
「何言ってんだこーちゃん。アタシがしいちゃんのぐらいの歳の頃にはもう木刀持って町支配を始めてたぜ？」
「そりゃアンタだけだ！」
「かっくいいです！」
「詩歌ちゃんが毒されていく！」
何だかんでこの騒ぎは夕方まで続いた。

「意外と近いじゃん」
教えて貰った小野家は俺達の通う中学校の近くだった。超肩透かしだ。

「遠回りだったな……」
「楽しかったです！」
「もう迷子になるなよ。じゃあ俺帰るから。ここまで来れば一人で帰れるだろ」
「ウチに寄ってかないですか？」
「小野と顔合わせたく無いんでな。絶対俺の事言うなよ」
「……」
そう俺が言うと詩歌ちゃんはにやりと笑みを浮かべた。
「やっぱりこうちゃんおにいちゃんは……」
「あ？」
「つんでれなのです！」
「なっ！？」
俺が何か文句を言う前に詩歌ちゃんはパタパタと駆けていった。
「はぁ……ったく」
俺も帰るか……

「ただいまです！　おねえちゃん！」
「っ！　どこ行ってたの！？　凄く心配してたのよ！」
「うぅ……ごめんなさいです」
「お買い物なら私が行くからいいって言ってるでしょ……全く……

でもありがとね。おかえり」
「はい！　ただいまです！」
「でも良く帰って来れたわね」
「親切なこうちゃんおにいちゃんに連れて来てもらいました」
「へぇ……こうちゃんおにいちゃん……ってこうちゃんってまさか」
「言ってしまいました！」
「……よりによってアイツ貸し作っちゃうなんて……最悪だわ……」
「おねえちゃんもつんでれなのです！」
「何処で覚えたのよ！？　そして何で私がツンデレなのよ！」
「こうちゃんおにいちゃんと同じ顔してるです！」
「――！　今度会ったら殴ってやるー！！」

「はっ！　殺気が！」
慌ててと周りを見渡すが何も居ない。
「気のせいか？　小野ばりの殺気を感じたんだが……」
ま……気のせいならいいや。
「……ん？」
俺の家の向かいの二つ横の家の電気が点いていた。つまりみなの家が。

「……は？」
そして俺は信じられないモノを目にする。
「あ！　こうちゃんだぁ！」
そう姫野みなづきがそこに居たのだった。
「は？」
アホの子のように口を開けたまま硬直する俺。だって……有り得ないだろ？　みなは旅行中の筈だ。成る程幻影か。幻影に違いない。
「久しぶりだね！　会いたかったんだよこうちゃん！」
よく……喋る高度な幻影だな……
「どうしたの？」
そろそろ現実に帰らなきゃ駄目かな……
「……んで……」
「うん？」
「なんでココに居るんだよぉー！！」
近所迷惑を考えず俺は叫んだのだった。
「あらあら……駄目よぉ。浩一さん……ご近所迷惑になりますからぁ」
そう言って現れたみなの姉……じゃなくて母親の皐月さん。
みなをそのまま大人にした外見の為姉にしか見えない。ちなみにみな以上にマイペースなお方だ。
「皐月さん！　旅行中じゃなかったんですか！」
そう言うと皐月さんは少し困った顔をした。何かトラブルでもあったのだろうか。なら仕方ないけど……
「う～ん。わたしはもっと楽しみたかったんだけどねぇ。みなづきが浩一さんに会いたいって言って聞かなくて～」
「えへへ」
「えへへじゃねえぇぇぇー！！」
馬鹿だ！　俺の幼なじみは本物の馬鹿だった！
「あ……忘れてたよ」
「あ！？　何だよ！」

「一番言いたい事――だよっ」
「……んだよ？」
「ただいま！　こうちゃん！」
「……」
顔が……赤くなるのを感じる。本当にコイツには勝てない……
「おかえり。みな」
俺も笑いながらそう返すのだった。

Essence11「それってその……デート？」

Essence11「それってその……デート？」

12月1日。午前8時5分。携帯のディスプレイはそんな表示を表していた。平日では遅刻確定だが、生憎今日は休日だ。　休日にそんな時間に起きるとは思わなかった。原因は分かっている。

「嫌な夢だ……」

また……あの悪夢を見た。こんな日に見なくてもいいだろうに。

「……」

8年前の……夢だった。

俺はニュースで火事の報道があると目をつむる。見ていると悪夢がフラッシュバックするからだ。躯中が熱く、嫌な臭いが漂う。それが人の焼ける臭いだと始めて知った。火事は俺から何もかも奪い……俺だけを奪わなかった。

「二度寝しよ……」

いかん……何時に無く、ネガティブになってしまった。気分転換にもう一度寝るかな……

トントントントン。

「……ん？」

二度寝を阻害するのはノックの音。恐らくみなだろう。それ以外なら恐い。

「……」

だが……この程度で起きる俺ではない。眠い時寝るのが俺の信条だ。

「こうちゃん起きてぇー！」

ノック＋こうちゃん起きて責め。気にしない気にしない。

「起きないとご飯抜きだよ？」

気にしない気にしない……って……え？
「後５分以内じゃないと朝ご飯抜き♪」
「起きます……」
勿論そのまま眠り続けても良かったが、その台詞に跳び起きた。
必死な言葉に俺は心を打たれたのだ。……違うぞ。朝メシに釣られた訳じゃ無いぞ。
起きてリビングに向かうとテーブルには朝食が並べられていた。
「ハムエッグにトーストにサラダ……完璧洋風朝飯だな……」
朝……飯？　って感じだよなパンメインだと。
「朝パンかな……？」
「語呂わりぃ……それより食おうぜ？」
「うん。そだね」
「「いただきます」」
早速一口。あ～美味い。ハムエッグうめー。
サクリとしたトーストもいい味出してるな。完璧な焼き加減、適量の塗られたバターの溶け加減も最高だ。トースト一つでもプロの味って出るんだな。
「はい。コーヒー」
「お。サンキュー」
角砂糖二個入りの調度良い苦味が口に広がる。
俺はコーヒーでみなは紅茶。優雅だねぇ～。　……インスタントだけど。
コーヒーミルが欲しいモンだ。または……バリスタとか……
「美味しいねぇ～」
にこにこと笑いながらトーストをかじり紅茶を啜るみな。紅茶は詳しく分からないがその姿はとても絵になる。どっかのお嬢様って感じだ。
「……」
コーヒーを飲み干し思考を切り替える。
１２月１日。何の変哲も無い日だけど俺にとっては特別な日。姫

野みなづきの生まれた日。すなわち誕生日だ。問題なのはみな自身がそれを特別だと認識しているか……確認してみるか。
「今日って１２月１日だよな？」
「ん？　そだよ？　１２月に入っちゃったねぇ」
「……」
「でもそれがどうしたの？」
「……いや」
やっぱりな。
瞬間記憶能力の癖に何で自分の誕生日忘れてんだ？　……
いや忘れてるんじゃ無い。ただそれが特別な事と認識していないだけだ。
『ただ単純に自分が生まれた日。それが何処が特別なの？』
つまり彼女は自分の事に無頓着過ぎる。
だからこそ周りの人間が気付かくちゃならない。毎年毎年……世話の焼ける奴だ。
「今日出掛けるぞ」
俺がそう言うと何故か硬直するみな。何か変な事を言ったつもりは無いが……
「え……？」
「何か不都合でも有るのか？」
「え……いや違うの……その」
顔を真っ赤にしてあたふたするみな。なんか新鮮だな……
「二人で？」
「ああ」
「お夕飯のお買い物とかじゃなくて？」
「買い物なら昨日済ませてるだろ？」
「ええ……と。じゃあ……それって……」
口ごもるみな。恥ずかしそうに頬を染めて。
「その……デート？」
そう彼女は言った。

デート……確かに言われて見れば……ううむ。そう言われると俺まで恥ずかしくなるじゃないか。
「あ～。似たようなモン……だな。お前が嫌ならいいんだけな」
「い、嫌じゃないよ！！」
みなは大声でそんな事を叫ぶ。彼女にしてみたらかなり珍しい。
「あ、ああ。じゃあ１１時くらいに出ようぜ」
「う、うん」
そして家を出るまで俺達はぎくしゃくしていた。それは別に嫌な感じじゃなくて。本当に不思議な感じだった。

Essence12「言わないで！！」

Essence12「言わないで！！」

外に出ると雪が降っていた。風賀町ではさほど珍しい事では無いが、積もる程降るのは今の時期珍しい。

風賀町商店街。いつも通りの筈なのに何故かいつも違うように見えるのは、

「……」

いつもと違うみなが居るからか……

「なぁ……みな」

「ひゃ！？　な、何こうちゃん」

顔を紅くして振り返るみな。こっちまで恥ずかしくなってくる。

「どっか行きたい所とかあるか？　遊園地まではギリセーフだが夜景の見えるレストランは流石にアウトだ」

「……う、うーん」

首を捻って考えるみな。そして……

「そうだ！　あそことかいいんじゃないかな！」

「あそこ……？」

「うん！」

思い当たる所が無いな……一体何処だ？

「じゃあいこっ？」

「お、おい……引っ張んなよ」

俺の手を引いて歩き出すみな。一体何処に俺を連れていくつもりだろうか？

「……」
「着いたよ～」
「……公園かよ！」
着いたのは、コズミニック２４（店名変えろや）の近くのいつもの公園だった。
休日なのに、いつものように人気と人気の無い公園だ。
「……ったく。金も掛からないリーズナブル過ぎる場所じゃねーか。本当にこんな所でいいのか？」
「うん！」
満足そうに微笑むみな。まぁ喜んでくれたならそれでいいか……
「私をここから連れ去ってくれますか？」
唐突にそんな台詞。いつもと違う凛とした声。すぐに気付く。劇の台詞か。舐めるな……一応練習はしてるんだ。
「……。申し訳ありません。騎士たるこの身、王の意思に背く訳にはいきませぬ」
「では……貴方自身はどう思っているんですか？」
「え……？」
「騎士としてでは無く、貴方としては……私を連れ去ってくれますか……？」
心の底から悲しそうな声。騎士の答えがどんな物か彼女は分かっていた。
「……私は……」
俺は……

「騎士としての立場が……今程憎いと感じた事はありませぬ」
「……」
悲しそうに哀しそうに、彼女は微笑む。
抱きしめたい。……でも、その役目は俺でいいのか？　みなから沢山の物を俺は返せない。そんな事は出来ない。
「……悲しいよね。近くに居るのにこんなに違う」
「……劇の話だろ。感情移入するなよ」
「……私は、こうちゃんに何も返せない」
「……え……」
「こうちゃんは沢山私に幸せをくれるのに……私は……」
それは、俺のずっと思っていた事だった。
「違う！！」
「――っ！？」
「みなは……お前は俺を救ってくれたじゃないか！　俺に沢山の事を教えてくれた！」
あの時……みなが俺に声を掛けてくれなかったら……俺はきっと……
「だから！　俺は！」
「言わないで！！」
血を吐くような悲痛な叫び。それがみなから発せられたモノだと最初は信じられ無かった。
「……みな？」
「……こうちゃんは忘れてるから」
「……え？」
「……そんな事が言えるんだよ」
どしゃり。
みなの身体が崩れ落ちた。
「……え？」
目の前の光景が信じられず、呆然としてしまう。
「……み」

何が起きてる……？
「みなぁ！！」
俺は直ぐさま、倒れたみなの側に寄る。
「おい！　みな！」
顔は青白く、息が荒い。額に手を当てるとかなり熱い。
熱があったのか……それにも気付かずに俺は……！
「待ってろ！　今家に……！」
背中にみなを背負う。意識の薄い人間は重い。
一刻も早く家に……！　近い筈なのに……こんなに遠かったか……？
「……ぐっ……」
頭が割れるように痛み始める。ヤバイ……これは…
「く……そ……こんな……時に……」
意識が……遠のいて……行く……俺は、どうでもいいみなを……早く……みな……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1766m/

中学生えっせんす！

2011年3月22日11時40分発行